

昭和三十三年十二月二十五日発行
洛友会報 三十三号(特別号)

京都大学工学部電気工学教室

創立六十周年記念誌

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部電気工学教室

洛友会

振替口座番号 京都二六九七七番

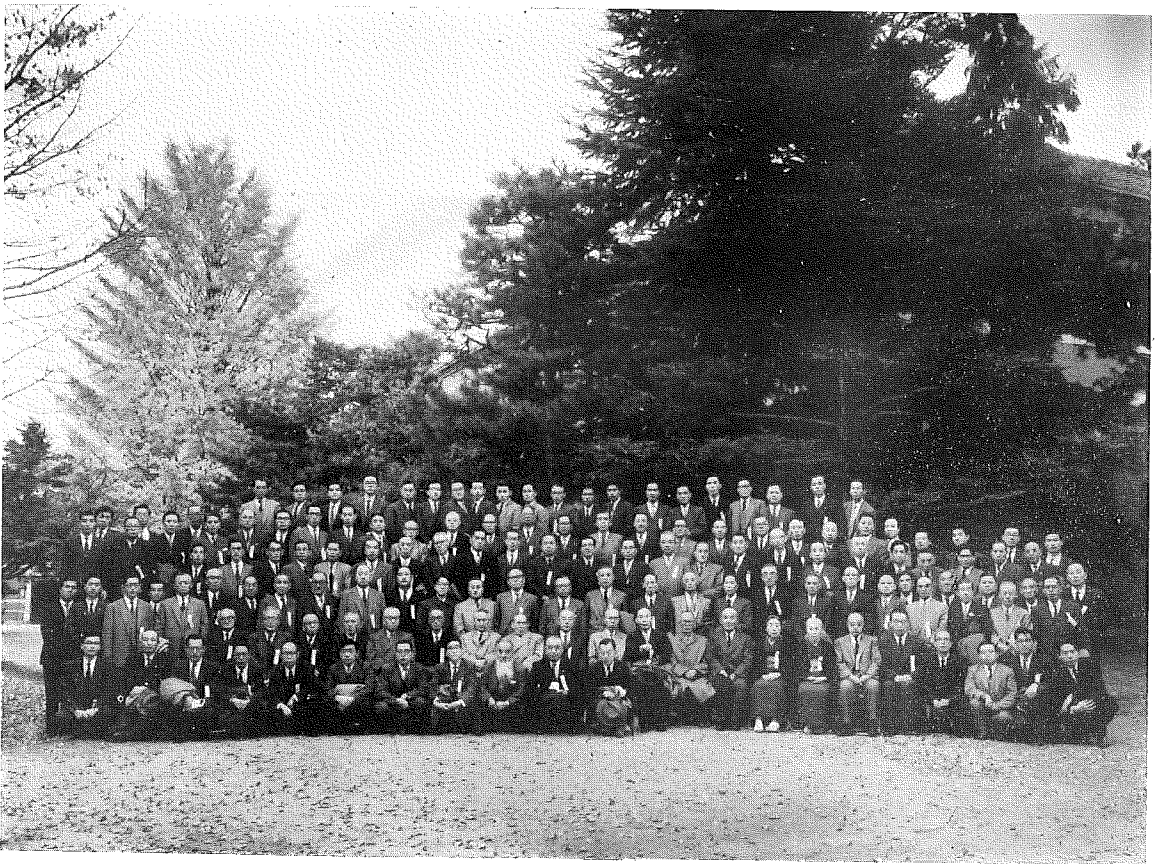
目次

一、電気工学教室年譜			
二、特別講演			
わが電気工学教室と電気事業の回顧とその将来	明三七	鳥養利三郎	
三、老会員から若い会員諸君へ	明三七	多田耕象	
四、五十八年間の思い出	明三七	吉田二郎	
五、六十周年記念に際し想出のまま	明三九	岡村金蔵	
六、電気学会入会物語	明四一	野田清一郎	
七、電気工学教室六十周年に当っての懐古	明四三	石川芳次郎	
八、最近の感想	明四四	川村公望	
九、恩師小倉先生と潜水艦用電量計	明四五	山下行雄	
一〇、わが恩師の思い出	明四五	道田貞治	
一一、思い出	大三	高柳与四郎	
一二、六十周年記念号に寄せて	大四	小笹進	
一三、思い出	大四	松尾正男	
一四、思い出に寄せて	大五	稲田虎彦	
一五、所感	大五	七里藤雄	
一六、信友会由来	大六	山村忠行	
一七、私の思い出	大七	加藤信義	
			一八、完備した教室
			一九、余生を楽しめ
			二〇、大正中期の学校生活
			二一、講義の型
			二二、独創と進取六十年の思出から
			二三、電気教室の思い出
			二四、洛北の一日
			二五、人工降雨の一考察
			二六、思い出の故人
			二七、量子論
			二八、三五年前の一とこま
			二九、同窓会
			三〇、感激を新らたにして
			三一、京都大学工学部電気工学教室六十周年記念行事
			一、記念講演会
			二、物故者慰霊祭
			三、記念祝賀会
			大七 阿部清
			大七 各務米次郎
			大九 菅 琴二
			大一〇 樋口貞三
			大一二 清水勤二
			大一二 今田英作
			大一二 本多静雄
			大二三 中村喜一
			大二三 一本松珠璣
			大三四 橋本真吉
			大三四 富永和郎
			大四五 小宮義和
			昭二 林 重憲

十一月十六日

創立六十周年記念撮影

右後方に見ゆるはなつかしい
公孫樹である



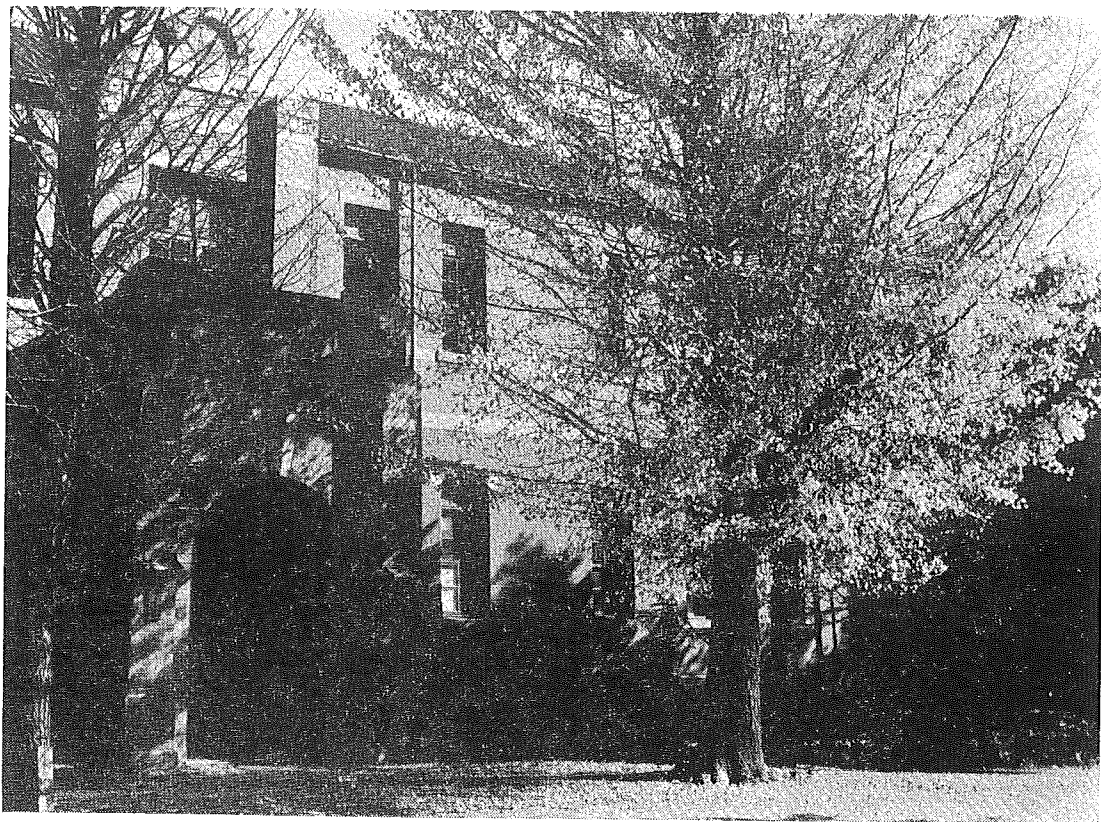
十一月十六日

物故教職員並に卒業生慰霊祭に於ける 祭主祭詞奉定



同上 齋主諱詞奉定





現在の電気工学教室

電気工学教室年譜

- 明三〇・六 理工科大学に電気工学科開設(二講座、定員一〇名)
- 三一・八 難波教授就任(電気工学才二講座)
- 九 授業開始(才一回入学者八名)
- 三二・五 才三講座新設
- 九 小木教授就任(才三講座)
- 三三・二 理工科大学の工学系学科卒業者の学士号を「工学士」と決定
- 三三・一〇 現在の位置に教室建物の一部完成、移転
- 三四・一〇 青柳教授就任(才一講座)
- 三五・三 教室の建物南半部完成
- 三六・一〇 学生定員一八名に増加
- 一〇 小木教授退官
- 三六・一〇 本学自家用汽力発電所運転開始(難波、小木、青柳教授の指導により完成)
- 三七・ 海軍の依頼により蓄電池の研究開始(難波教授、小倉助教、関野助手)
- 三九・ 工作室完成
- 四二・ 才四講座半講座新設
- 五 小倉教授就任(才三講座)
- 四四・ 才四講座充実
- 七 本野教授就任(才四講座)
- 大ニ・一 電気評論創刊
- 一〇 私立電気工学講習所発足
- 三・四 工科大学に中央実験所創立
- 五 学生定員三二名に増加
- 七 工科大学が理工科大学より分離、中央実験室一部完成
- 六・一〇 財団法人青柳研究所創立(現在の応用科学研究所、理事長鳥養利三郎)
- 七・一 小倉教授退官

八・二 工科大学が工学部となる

九・八 電気工学才五講座新設、学生定員五〇名になる

九・八 清水教授就任(才五講座)

九・一 中央実験室完成、本館の一部二階増築

九・一 難波教授退官

一一・五 電気工学才六講座新設

一二・一 鳥養教授就任(才三講座)

一三・二 大竹教授就任(才二講座)

一四・一〇 清水教授北海道帝大へ転出

昭四・二 加藤教授就任(才六講座)

四 大竹教授退官、岡本教授就任(才二講座)

八・三 作工室出火

九・二 松田教授就任(才五講座)

九 教室新館竣工

一二・八 羽村教授就任(才二講座)

一三・一〇 電気工学講習所を立命館に移管

一四・七 本野教授退官

一四 研究室増築

一五・三 阿部教授就任(才四講座)

一六・一一 中央実験所を廃止し工学研究所を設置

一六・一二 学年短縮による才一回卒業生を出す

一九・一 航空電気才一講座新設、学生定員七〇名に増加

三 林重憲教授就任(航空電気才一講座)

一九 研究室および講義室増築

二〇・一 航空電気才二講座新設

二〇 疎開のため建物一部取壊し

二〇・一〇 鳥養教授総長に就任

二一 林重憲教授電気工学才三講座へ

二一・一 航空電気才一才二講座廃止、学生定員五〇名に減少

七 羽村教授退官

二二・一〇 京都帝国大学を京都大学と改称

” 京都大学創立五〇周年祝賀式挙行

二三・六 岡本教授停年退官

二四・一 電気工学教室五〇周年記念事業を行う

二四・二 林千博教授就任(才二講座)

二四・四 大久保教授就任(才一講座)

二七・六 新制大学発足、学生定員六〇名に増加

二七・三 電気工学才七講座新設

二七・一 洛友会発足

二八・二 前田教授就任(才七講座)

二九・三 最後の旧制卒業生、最初の新制卒業生を出す

二九・四 新制大学院修士課程発足

二九・八 洛友会会報創刊

二九・四 電子工学教室設置(三講座、学生定員二五名)

電気工学教室は五講座、学生定員五〇名となる

阿部教授、加藤教授は電子工学教室へ

阿部教授停年退官

清野教授電子工学才二講座へ

電子工学才四講座新設

三三・四 松田教授停年退官

三三・一 大谷教授就任(電気才五講座)

” 近藤教授就任(電子才四講座)

” 四 電子工学才五講座新設

” 一〇 加藤教授停年退官

三三・二 池上教授就任(電子才一講座)

” 西原教授就任(電子才五講座)

三三・一一 電気工学教室六十周年記念事業を行う

わが電気工学教室と電気事業

の回顧とその将来

鳥養利三郎



実は教室の六十周年になるから、昔話をしろという事だけを聞いたんですが、あの演題は、私は知らなかった。こゝへ来てはじめて知った。それであの演題の通りのことは云えもしませんし、云わないつもりであります。結局長い間京都大学でお世話になって、京都大学の卒業生であり、そして一生涯大学でうるうるしておりました者として、見たこと聞いたこと、或は自分がしたことなどを系統立てるわけでなく、とにかくくだららとしゃべらして戴きます。

つきましては、或はお聞き苦しいこともあるかも知れませんが、自慢話をするわけでありません。けれどもそういう風なことに或はならんとも限らない。そういう点は前もってお断りいたしておきます。それからこの間から旅行続きで少しくたびれておる様だから或は途中でへたばるかも知れません。そのおつもりでお願いいたしておきます。

先程林さんからお話がありました様に、京都大学は、明治三十一年六月十八日に開設されたので、御承知の様に、すでに昭和廿三年、戦争が済んだ直後に、満五十周年を華々しくやりました。あの当時、誠に混乱していた、あゝいう難しい社会の中で、あれ程の事が出来ましたのは、これは私共思い出の深い

ことでありまして、これも皆京都大学の一つの繁栄というか、威力というか、のしからしめたところであろうと思っております。御承知でありましようが、京都大学が明治三十年に開設されました時の、理想というか、抱負というもの、これは仲々たいしたものがあったらしいのであります。私は実は数えてみると電気学の教室では才十二回の卒業生であります。電気は一年遅れているので京都大学が生れたのは明治三十年だが、電気教室が生れたのは明治三十一年になっておるからして、一年あとなのであります。で、私は十二回、今年はずか五十回の卒業生を出した筈なのであります。ですからそれだけの多数の卒業生が出ておるのですが、おそらく今生きておる中で、私は古い方で、野田さんが今お見えになっておられますが、この野田さんと私の二人一番古いと思うんであります。その京大が生れた時の抱負というか理想というか、云う様なものはしばしば繰返され述べられておりますが、要するに学問そのものを、基本的に基礎的に研究するというのであって、官吏を養成する為に創ったんじゃないと云う事を、しばしば云うておるんであります。これは西園寺さんの理想であって、東京大学が、その当時官吏を養成するということが主なる目的になっておって、東大の卒業生は殆んど全部が官吏、その当時の官吏、今の公務員であるというのが慣例というわけではないが、まあそういうやりであった。民間会社にいく人はむしろ、それ以外の人が行くようになっておったそうであります。ところが京都大学は自由主義と云いますか、自由な民間人を作ることをその目的としたのだというのであります。京都大学のはじまりの方の卒業生には、官公吏になった者は極めて少いのであります。今から考えたら不思議な様に思はれましようが、私が卒業したのが大正元年、明治四十五年の続きの大正元年であります。それまで、京都大学の電気卒業生で一人も通信省あたりの官吏になっておった人は出ていない。電信電話の方には少しは居られたけれども、電気行政の方をやる、所謂、昔の電気試験所とか、各省の電気行政という様な方面には一人も就職していません。で、私が卒業する前に、その当時の先生から、「おまえ、一つ行ってみんなか。」と、「こゝらでお前が行けば、はじめて行くんだから、はじめてだと、イジメラレルだろうから、それ覚悟で行ってみるか。」という話しを受けて、「やりましようか。」という様なことを実は申し込んでありますが、しかし丁度、私は不幸にして卒業間際に病氣しまして、卒業が遅れたんで、とうとう行かなかった。それから三、四年たっ

て、始めて、その方面電気行政の方面に京都の卒業生が行ったという様なことになっております。それが一つの例なんでありまして、そういう意味で、京都大学工学部の卒業生は大部分が民間に入って、民間人として活躍をするという様なことで、来た様であります。これは京都大学の生れた時の理想であって、

電気教室も勿論、この主旨にそうてやられたに違いないのであります。大学の制度といふますか、教育のやり方が全く自由主義的になっております。明治三十年という古い昔にこういう制度が採用されたということは、私共、今からみても不思議に思うのであります。現在の大学の制度はすべて、京都大学の明治三十年位の制度からみると逆行してあります。逆になっておいて、今日の方がはるかに旧式になっておるんであります。例えば純然たる科目制度を明治三十年から採用した。今日の様な科目制度ではなしに、更に徹底した科目制度を明治三十年に採用しておいたのであります。私共入学した時に、細長い折たみ式にした帳面を入学したらすぐ渡されるんであります。その帳面に学科の名前をずつと書いてあって、その下に及落という欄があり、教授のハンコを押す欄がありまして、その帳面を持っておいて、試験を受けるたんびにそれを出すと、合格しておいたら先生がハンコを押してくれる、落才なら押してくれない。その帳面をもらってはじめて、これはいかんということになる。そうすると、その時に、もう一度、その学科をいつでも受けければいゝんであって、六年間に受けければいゝ。三年が在学ですけれど、六年まで許されたのであります。それでその間にいつでもとればよいんであって、及才とか落才とか云うことはないんであって、学科学科を、ハンコさえ押してもらえばそれでよろしい。全部そのハンコが揃ったからはじめて卒業試験をして下さいという請求書をだす。そしたら何時でも卒業試験をして下さる。ですからその当時の大学の卒業は三月、四月とは決っております。三月に卒業する人もあり、五月に卒業する人もあり、七月に卒業するものもあれば、十一月であろうが、十二月であろうが、いつでも御本人の希望の時に、そのハンコさえ揃えば卒業させてもらえる。私共は実は十一月に卒業した。あたりまえは、私の時は七月の卒業が正規の卒業であります。十一月に卒業した。そういうわけで、実に自由な科目制度を採用しておいた。その当時、東大は勿論、及落の学年制度であって、一科目でも落ちましたらば、全部どの科目も試験を受け直す、所謂学年制度であった。京都大学だけが、今云った受教簿。教を受ける簿というから受教簿というので、なつ

かしいです。そういうたハンコが揃ったらいつでも卒業試験がうけられるという事で、実に自由活達な制度をやっておったわけでありまして。今日からみれば、今日の状態よりはるかに進歩したものであった。

それからもう一つ京都大学の特徴としておったのは、あの当時メートル法を採用したということでありまして。これは今からみたら何でもないことですけれども、あの時代は尺貫法は勿論、それからフートのポンドが主として用いられたんであって、京都大学だけがメートルシステムを採用した。受教簿とこのメートルシステムは、京都大学の開設の時の二つの大きな特色であった。

丁度私と同期生で、森君というのが九州大学の教授になっていったんですが、森君が九州へ赴任して行って、ダイナモの設計をうけたといたうんですが、そのダイナモの講義をしておられたのが荒川文六先生で、今もまだ御存命ですが、荒川先生がダイナモの講義をしておいて森君が設計をうけたと、荒川先生がフート・ポンド・インチで講義をしておられるんで、カレント・デンシティというインチに付き何千アンペアというので設計をする様に講義をしておるんで、我々はミリメートルスケアに何アンペアというので頭に入っているんで森君は実に困ったそうでありまして、自分の頭を切換えるのにずいぶん骨が折れたということでありまして、京都大学の行き方というものが、その当時から少しその先端を行ったというか、その当時としては実に新しいことをやっておったんであります。ですから電気教室も勿論その流れに沿って進んで参ったのであります。この大学のことをいう前にその当時の周囲の状況もちょっと申しておく必要があると思ふんであります。その当時の京都の町は、もう実に今の京都とは大変なちがいであって、まずオ一に電灯というものがないにあって、もうお金持ちというかハイカラな人だけが電灯をつけておったんで、一般市民は電灯をつけていなかった。私共大学の在学三年間は、右油ランプであります。下宿を引越す度にランプをもって引越しをしたんであって、電灯がついたのは大正元年である。

これは京都の三大事業といつて、東山線或は河原町線の電車が開通したのが大正元年で、その時に、蹴上の発電所が大きくなってはじめて電灯が普及して、大正元年以後京都市民は貧富の区別なく電灯を使う様になって来た。私共はランプだけで卒業したんであります。

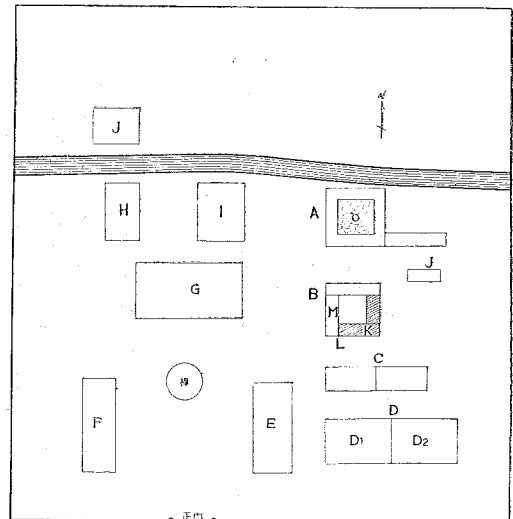
それから水道は勿論その当時はない。ガスは無論なかった。ですから大学だ

けが電灯をつけ、水道を使い、ガスを使っておったわけなんであって、市の状態と大学とはまるっきりはなれた様な状態であった。だから大学は火力発電所も水力発電所も自分でもっておった。八瀬に小さな水力発電所を持っており、自分で電気をだして自分でやっておった。水道は吉田山の上に今も残っており、それがあれは極くちっぽけなものですが、あれで全部まかなえた。そういう風なわけで、市の状態が全く昔通りであって、大学だけが進んだ施設をしてやっでいかなければならなかった。電気も水道もガスも。ガスもこゝにあつたんで、大学の東側に自分でガスを造るタンクがあつてそれから供給するし、電気は自分で発電するし、水道は吉田山に水源地を持つし、大学自らでやらざるを得なかった。そういう風な時代であつたんで、その時代に大学というものが苦勞も無論多かつたわけでありませぬ。だから今とはすっかり違ふんで、京都の電車は古いんで、世界で二番目の電車で、シーメンスタツトで、ドイツのシーメンスで電車が初めて走つて三番目に京都で走つておるんであります。これは昔話であります。けれども近頃の電車は、出発する時は皆二つチンチンとひびくし、止る時は一つひびく。あれは京都から生れた。京都で初めてあゝいう信号を決めた。それから出発をした。それから全国に広まったという様なわけだ。市には電車が世界で三番目の電車があつた。水力発電所も勿論市にもあつた。蹴上にあつたんで、これも世界で二番目で、ナイヤガラ発電所の次に京都で、世界で才三番目に出来てゐるんで、その水車が電気教室に記念の為に残してある筈です。そういう状態であつたんで、大学というものがこゝに建てられた時に、市民が驚くべき存在であつたに、或は横暴な存在であつたに違ひないんであります。それだけ市の為に貢献したことも多かつたろうと思ひます。

月給もその当時安かつた。今だに憶えとるが、私が助教になつたのが大正三年で、はじめで月給をもらつたら六四四三五銭であつた。年俸八〇〇円だつた。そういう風な状態であつたが、今は公務員は給料がどんどん上ります。当時は上りませぬ。私は六四四二五銭もらつてから三年間一厘も上らずであります。それから、年末の賞与は一厘もありません。年末賞与があれだしたのは、大正十二・三年頃からであります。

私は十三年は教授になつたが、八、九年の間は、年末賞与というものは一厘ももらつたことはありません。毎月の月給だけで来たのでありまして、今と比

京都帝国大学見取図



- | | | | |
|----------------|-------|---|------|
| A | 電気教室 | F | 物理教室 |
| B | 工学研究所 | G | 数学館 |
| C | 機械工場 | H | 法学部 |
| D ₁ | 機械教室 | I | 文学部 |
| D ₂ | 土木教室 | J | 寄居 |
| E | 冶金 | | |

べたら何もかもがそういう風にかわつておつたんであります。雑談をよくする様であります。そういう事でありませぬので、その当時の京都大学というものは今日から見ますという事、非常に小さい学校であつた。電気の学生の定員は割に多かつた。三十五名位。けれども大学全体がその当時は四学部しかありませんで、四学部で、法学部が一番大きいんですが、大きいても私共の学生時代には法学部の学生は一年生三、四十名しかいなかった。ですから全体でもって法学部が百五十名位の学生しかいなかった。今の一年生よりは少なかった。従いまして、大学は非常に小さいスケールであつた。まあ私の憶えているところを書く、(図参照)この他に医学部は別にあつた。けれども本部構内にはその当時はなかつた。北構内は全部畑だし、あつたのは本部構内と医学部だけなんです。

Aは電気教室。私の学生の時はもう出来ておつた。その前に半分建て、それから又後に半分建てた。無論二階なんかなにもありません。電気教室の真中にアンテナだか避雷針だかのペラボールに高い奴がボンと建てておつた。これは今ありません。木造の白壁の建物がBにあつた。これが工学研究所に今なつて

いるんです。現在は工学研究所になっているんですが、これは古い建物です。これは何に使っておったかという、化学の実験室と製図室、電気の製図室という、我々はこゝでやった。この中で製図をやりました。大学で一番古い建物です。それからCに機械の工場があって今でも残っております。機械の工場が、エンジンのまわっている工場がこゝで、その南に木造の細長い建物Dがあって、そして半分に仕切って、D₁が機械教室で、D₂が土木教室、一つの細長い建物の中に半分機械教室があって半分土木教室があった。それからEが冶金の教室で今の通りである。現在も昔のまゝです。二階がついただけが違う。こゝにもう一つこれと対象的なのがFにあって、これも平屋の対象的な建物が二つあって、これは主として物理と数学がこゝにおった。今の燃料化学やなんかおるところで、それからGに本館で立派な二階建てのレンガ建ての立派な堂々たる建物があった。これが京都大学の本拠であった。これは本部と、それから主として化学、理学部、工学部の化学教室です。即ち化学がこゝに取陣っておった。それから木造のベラボローな平屋建ての大きな広いのが西側にありまして、Hが法学部なんです、これは影も形も今は無いんです。前には木造の広い大きな建物Iがあって、これが文学部、これも今は無いんで、それだけでは他何もなかった。それで電気の教室の北側はこゝらに川が流れておった。白川で、今はありませんが、今は暗渠になっておって、今は上に蓋をして上が道路になっている。昔はこゝに白川から流れてくるきれいな人の流れがずっと流れていばらでもっておい繁っておって、うす汚い所であった。それからその向い側にグラウンドがあった。そのグラウンドで、私共、走ったり、スポーツをやっておったのであります。それで今の土木、建築のある建物がまだなかった。西の方が松林であった。松が非常に沢山生えており、その中に寄宿舎Jがあった。こういう風なことで、今からみたら、私共が死んだら、これを覚えて居る人が殆んどないだろうと思います。そういう風なことで、甚だ貧弱なものであったのでありますから、今日の状態からみたら、おかしな様なことでありまして。今日の北の構内、農学部、理学部の構内は全くの畑で大学のものじゃなかったんですから、非常に狭苦しい小さなものであったのであります。こういう所で電気教室は、その当時としては、他は皆貧弱なのに、電気だけが、今いゝ建物が建っておりますが、昔はレンガの建物が他になかったので、いばっておったわけなんです。それから、それから、その真中に、高いアンテナだか、避雷針だか、わか

らん様な高いのがあって、そして、大学のこの近所に来れば、電気のタワーがみえておるんでありまして、そういうことでなかなかよかったです。中庭が牡丹が植わっておって、五月の上旬に牡丹会と称して学者連も教授も皆寄って、あそこで非常になごやかに宴会をしておったのであります。その当時は学生が少なかったから、一年の人も三年の人も友達であった。こゝにみえている石川さんなんか、私が一年の時三年生で、今でいうと一年と三年なら縁が薄いかも知れないが、我々は学生時代から友達になって、知り合いになって懇親にしておった。それは牡丹会のおかげであったわけです。先生の前へいってクダ巻いたりして、随分やっておったので、今から思えば懐しいことであります。建物のついでに、一寸申しますが、電気教室ではその後、ここに書いて下さった年表（年譜参照）によると、何年にどの部分が建った、何年に何が建ったと随分建っております。次々に広くなり現在の様な堂々たる電気工学教室になったのであります。

ところが、私、一つ忘れることが出来ないことがあります。

大正の終りから昭和のはじめ頃にかけて京都大学という所は実に火事をよくやった。京都で火事というと京都大学という位によくいった。これは、京都大学が必ずしも多いわけじゃないんですけども、昭和のはじめには全く頻繁に火事がいった。医学部で小児科が焼ける、病棟が焼ける、盛んに焼けておった。その内に電気教室が焼けた。電気の火事は小さい火事で、Jに五十坪の小さい木造が一つあったんです。これは作業場です。これが焼けた。その当時の財産帳面を調べると云うと、一万何千円かの家なものであります。それが一つ焼けた。焼けたのは、その前後に火災が非常に多くて、京都大学の火事というものには世間で注目されておった。そしてしかも、原因調査がその当時はあまり行われていないので、すべて漏電ということをかたをつける慣習になっておった。漏電といえれば罪にならなくていった。火事がいくとすぐ「漏電」というところ。ところが私は「漏電でない、漏電というものはそんなにあるものじゃない。電気で火事がいったら、使う者が馬鹿な使い方をしたから火事がいくので、所謂漏電というものはないんだ。」としきりに主張しておいた手前、電気教室が焼けたものだから一寸困った。時の総長は、「漏電にしろ。」というのですが、「漏電にしたら、何も罪にならないし、皆責任解除になるから漏電にしろ。」という。私は、「漏電でない。」と頑張り通した。激しく議論した後、「仕方がない

から正規の手続きで進もう、君も進退伺い、辞表をだしてくれ。」と、それから総長も、無論、進退伺いを出すと、よろしい。それでちゃんと書類を作って持っていった。迂余曲折の後その損害は一万二、三千円かの建物でしたが、三十万位予算をくれました。三十何万予算をくれたので建てたのが、本日の教官室になつてゐる建物であります。あの鉄筋コンクリートが三階になつていて、下が工場、製図室、上が教官室。これは、自慢話しじゃないが、電気教室で鉄筋コンクリート建ての一部あるのは、私が辞表をふところにしてやったんだということだけは覚えておいて貰いたい。ところが人間というものは運が良いと、何でも運が良い。私はもう覚悟しておつたが、覚悟しておつたら、その年の暮に皇太子がお生れになつた。特赦令が出た。それで、私は詮議に及ばずという辞令をもらつて無罪になつた。教室は建つし、私は無罪になるというので思ひ出が相当深い。その時お生れになつた皇太子殿下が、今年御成婚発表だといほかに聞くと、何だか電気教室の六十周年の一緒に思ひ出が色々あるんです。

又、これは大学全体に関係することではありますが、電気教室に対して相済まなんだとも思うし、或はやむを得なんだと思つてあきらめてもおるんだが、戦争の始まる直前か、その頃に、電気教室に、航空電気学という講座を二講座もつたんであります。で、私は航空には縁が深く、工学部の航空工学教室というものを作つたのは時勢のしからしむるところであります。実は私の時代で作つたもの、私が多少奔走しまして、教官も自分の手で物色してやりまして、航空学教室を作る時には、多少骨を折つたつもりでおるんであります。その時に航空電気学というどうも妙チキリンな名前のものであります。そういう名前ものを二講座、私が電気工学教室に作つたのであります。これは何も航空というものをつけんでいいのです。今日の電子工学がやりたかつた。今日存在している電子工学教室を作りたかつたが、その当時は戦争の初期であつても航空という名前をつけないと、予算が通らん時代であつたので、理学部には航空物理学という講座が出来るし、それに対応して航空電気学というものを作つた。これは今の電子工学の様なものをやつてもらふ。又それが発展して来れば、オートメーション式のものになつてくるといふつもりで、予定しておつたんであります。喜んでおつたのであります。戦争に負けた結果航空学教室はつぶされ、航空電気学講座はたちどころに取消しを命ぜられた。それが私

の総長時代ですから、私は自分の手で作つた航空関係の教室なり講座なりを、私の総長時代に、みんな取上げられた因縁になつておるんであります。これが私にしても、又、あまり良い意味でなく思ひ出が深いんであります。その航空を取り消される時に、色んな策動がありまして、日本人というものは実に嫌なものだと、私はその時思つたのであります。色んな投書が横行すんであります。投書が盛んに占領軍の司令部へ行つて、「京都大学では航空と名前のつく学科なり研究施設なりを、名前だけは許して実質的にはやめておる。」とか、「あれを詮議すれば由々しきことだ。」という投書が盛んに行つておる。まして、私は二回も三回も調べられたことがあるんであります。で、「いや、そんなことはない。早速廃止してしまつた。」と云つてもきかないんで、遂に決議した決議録をみせたり、終いには、横浜の才八軍の司令部へ直訴したりして、許してもらつたといふとおかしいが、まあ済んだといふ思ひ出があるんであります。この航空を作る時にも苦労しましたが、又つぶされた時の苦労は、私としては実に大きいんであります。随分勇気を要したのであります。

で、今、電気には航空電気学を作つてもものにならなかつたお詫びであります。その後現在の教授の方々が、電子工学教室を作つて戴いたのであります。秘かに、私はそのあとをまつとうして戴いたといふ、うぬぼれた考えをもつております。これは結果は良かったのであります。航空も生まれて来るし、これは大変良かったと思つてあります。

火事の話が後になり先になります。昔は火事というものは焼け太りと云い、今でもそうらしいです。個人の家が焼けたら、焼け太りにならない。こりやもう個人は焼いたら大変なえらいことですけれども、会社とか、公けのものといふのは、ちよつと辛棒してるとすぐとはいかなくても、大抵良くなる様です。京都大学の本館、大正元年の十月か十一月かの頃でした。これはもう一ペんに焼けてしまつたんです。随分派手な火事であつた。今だによく憶えていますが、大正元年の十月か十一月に京都大学の本館が焼けて、その焼けた結果、今の時計台の建物が建つたんですが、これは随分年数がたつて建つた。大正十二年頃迄空地になつて空いとつたんであります。大正十二年はじめて時計台の建物が完成したのであります。で焼け出された為にそこにおつた者が北の方へ移つて、今の理学部の化学と工学部の化学になつたんであります。現在の理学部の化学と工学部の化学は、その火事の後で、大正三、四年頃建つた。従

って松林が伐られてしまし、寄宿舎はとばらされてしましして、今の所へ寄宿舎が移っていったとさういふことになる。

あの松原は実にいい松原であつたのでありますが、今になってみればまあ大学の発展史なんかから借しいと思う。それからその前後に土木教室が、今のところへ移つた。それ迄D₂におつた土木教室が機械に全部譲つて、今のレンガの建物の所へ移つた。それから大正の八、九年頃か、十年より前に建築が出来て、そして建築教室がそこに建つて、そして農学部がひき続いて北の方に建つたという風な順序になつていっておるんであります。そして漸く今日の状態がやつて来たのであります。

それから、電気教室と工学研究所とは縁が非常に深いんであります。工学研究所の火事があったのはその直後の事なんで、図の様に真四角になつていた建物のKの南側だけが焼けた。これが全部焼けなかったということは、電気教室のため、又私個人のためにも非常な幸せであつた。といひますのは、この建物の北の方の今の事務所になつておる所は別であります。南の方の大部分は電気教室の高圧実験室になつておつたのであります。その高圧実験室というのが、又これが私の恥になるんであります。大正の初め頃、私が学校を出てしばらくたつて、試験用変圧器というものを大学で買いたいということになつた。二〇万Vの変圧器はジーマンの二〇万Vのを買つたんで、それは今も電気教室の真中の実験室にある筈なんです。二〇万Vは買えたが五〇万Vがどうしても要る。五〇万Vを買おうとしますと、その当時として五万円要る。五万円有れば、五〇万Vの変圧器とそれに附属の配電盤その他一式が出来てゐるんであります。三菱商事、三井物産に見積りを取ると、五万円よこしたらチャンとやると、こういうわけなんです。ところが、その五万円というのが大金なんです。その当時は大金であつて、とても大学では買えないが、五〇万Vの試験用変圧器が要るというんで、私に作れ、無茶な注文であるけれども作つてみる、と。それから、あれやこれや色々まあやりました。やつて結局、振動現象のおこらないコイルの構造を考えだしたりして、それでまあやることになつた。やつたんですが、唯困つた事にはブッシングが無い。五〇万Vのブッシングというのは、その当時出来なかつたんです。日本では出来なかつたんで、なんかやかと色々その議論をした挙句に、ブッシングのない変圧器にするより手が無いじゃないか、アメリカでブッシングのない変圧器が当時の雑誌に

チャンと出ておつた。油の中からブッシングをひっぱりだしたのが出ておつて、使はん時には巻上げておいて、使う時には中へ垂ろすというのが出来ておつた。金は五万円とても無いんだからこれでいくより手が無いんじゃないかと云うので、結局Mの所に油の池を作つて、そこへコイルを入れて、そして変圧器のリードをそのまま油の中からひっぱりだしてくると、つまりブッシングレンの変圧器を作つた。その油の池がここにあるわけで、若しも火がついたら大変なことになつてしまふんです。

私は丁度大阪へ行って留守しておる時にこれが焼けたんですが、早速駆けて帰つたが、幸いにしてここは残つておつた。だから油の池も無事にすんだ。Lの辺迄、ここ迄採鉱冶金で使つておつたんですが、この辺迄焼けて来ておつてMは焼けずに済んでほつとしたわけなんです。で、矢張りこの時も焼け太りがありまして、私のしくじつたブッシングをつけることの出来なかつた非常に不便な厄介な変圧器の代りに、今林教授がお使いになつてゐる工学研究所の真中にある変圧器を買うことにしたんであります。

それからまあいろいろな、電気教室の発展のためにはいろいろな事がありましようが、私いまだにいろんな世の中の進歩が甚だしいという事を考えるたびに思い出すんであります。まあなんかまとまりがつかんかも知れんが、昔話の一つとしてやれば、私共は明治時代に大学に在学しておつたわけで、まあここでは野田さんと石川さんと三人位、小田島君もいる。四、五人位しか明治時代の学生はいないのですが、この明治時代の学生というものは、大学に三年間おりましたが、何も習うておりません。今からみたら何も大学で授業を受けていないのと同じ事です。オ一その当時は今日な様なものは何もなかつたんです。そして今日の世の中から影を没してしまつて無くなつた様なものばかりがあつたんです。例えば、発電所なんかという、ステイムエンジンだけです。蒸気タービンというものは少しあつた。大阪電灯が初めて蒸気タービンというものを大阪で使つた。それだけで日本中に蒸気タービンが動いておる所はどこもありません。大学の講義で蒸気タービンの講義はなかつた。蒸気機関の講義をさされておつた朝永教授は非常に凡張面な真面目な方で、実に進んだ新しい事を勉強して講義される先生であつたが、タービンの講義はまだされなかつた。大分年数がたつてから、タービンの講義をはじめられた様な事なんで、私共は毎週四時間、一年間みっちりステイムエンジンの講義を聞いて、そして実習に

行くというと、カットオフがどうだとかなんとかいう。今の方には御
様な実習を盛んにやったものなのでありまして、スティームエンジン、点張
り、原動機といえばスティームエンジン。ところが、今日スティームエンジ
ンはありません。現在では汽車の、ロコで残っているだけであり、汽車も、しか
も田舎の汽車だけの話で、もうみることが出来ないわけであり、そういう
ものが私共の学生時代の一番むつかしい講義であったし、一番力を注がれたの
であったから、今日からみたら何も習うておらんと同じで、いらん事はかり
やって来ておったということになるわけなのであります。例を挙げればすべ
てがそうなんです、例えば電信電話といつても有線だけしかないんであって、無線
はあるにはあったけれども、殆ど試験的なものであって、スパークギャップの
振動だけなのであります。そのスパークギャップでダンブドオッシュレ
ーションで通信をやるんですから、長波も長波も大変なもので、こんな厄介なことはな
いんで、私共は大学を出て若い時に研究室で、夏なんか裸になって暗室に
して、そしてスパークギャップで火花をとばしてオッシュレーションを出すのに苦
心惨たんをしたものであります。今日の真空管というのはずっと後に出来た
んで、真空管のはしりが、一番のしょっぱなに出たのが一九一四年である
んです。これがおまけに、その時に二極管で、それが三極管とかんどん
と進んで来るのはずっと後の話なんで、私共の学生時代にはそんなものは夢にも
存在しなかった。電信電話といえ、もうツートン、ツートンの記号を教えら
れた。あれには閉口した。電信電話の先生は教えるものが無いんですナ、つま
り。教えるものがないが、一週一時間か二時間講義しなけりやならないので、
それで木柱の建て方と、ステアの張り方です。それからチェーンでもって測
て行く、距離を測ったりなんかして測量していく。そんなものばかりで電信電
話も済んで、あとはツートンの符号を教えてもらったり、それから機械の青写
真をもらったりする。ダイナモにしても皆その通りでありまして、今でもまだ
あると思いますが、この電気教室は古いから、ここの教室には、今世間でなく
なった様な、妙な面白いダイナモが沢山残っておるはずなのであります。プラ
ツシユアークダイナモなんか今あります。あんなものはもう今日みたいと思
ってもありやしない。そういう風なものばかりです。三年間習うんであります
が、しかし三年間要らない。習う事もなし教える事も無いんだから、三年なん
て要りやしない。いりやしないから、二年すんだら後はもう放免みたいなもの

三年になるとすぐ実習に行く。実習に行つて、半年か八ヶ月の実習をして
帰つてくると、それから卒業論文ばかりであつて、それから卒業で、事実は二
年で、二年でも時間が余つて困つたらしいんであります。で、習う事もなし、
教える事もなし、そして又今日無くなった様なもの、この世に存在しないもの
ばかり、私共は習つて来たんであります。学校を出て後ペラボウによけいに新
しい事が出来て来て、学校時代は楽であつたが、卒業してからはかえつてワツ
と進歩したのでエラクなつてしまつた。そういうわけで、それで私は冗談でよ
くいうんですが、新制大学になつて四年の内二年も一般教育にとられるから、
二年しかない上、教える事が山程ある。昔とちがつて、有り過ぎて、五年かか
るうが七年かかろうが、教える事が有り過ぎて困る位有るんだから、学力の低
下をきたすというのは、これはもう当然の事でありまして。しかし我々は自分の
生涯をふりかえつてみると何も習つていない。大学時代に学力は非常に低下し
ておつた。私共の学力というのは、今日からみたら、低下も低下も零に等し
い。事実何も習つてやしない。けれども、私は老人だからとも角として、私の
同僚達、年輩の等しいような者は、自分で勉強して、えらい進歩について来て
いる。のみならず、進歩につくだけになしに進んできておる。だから、学生の
学力の低いことは、私はどうでもいいことで、そんなことは問題にならない。
あとでついていくだけの、或は進んでいくだけの、素質を教授から貰えばそれ
で十分だと、まあそんな気がする。それは私共の経験から云うことで、そうい
う風な例の一つに一寸云つてみますと、私が大正十一年の暮だかに西欧から帰
つて来たのであります。その時にようやくアメリカでブロード・キャスト
ングが始まつておつたわけで、欧州ではまだ放送無線の実用しているのをみま
せんでした。私が居る時には、アメリカに渡つてはじめて、方々の家の上にア
ンテナが今のテレビみたいな、民家の上に沢山並んでおるので、ハハ、や
つておるな、と見て帰つたのであります。帰つて来たら、早速つかまへられて、
「お前は欧州で色々見て来たろうから、無線放送の実験をしなさい」といふこと
でした。そこで、六月十八日が大学の記念日であつたので、記念日は、そ
の当時は今と違つて、市民に公開して大学の実験をみせ、講演を聞かせ、色々
のことをしてお祭りをするんであります。私にその時に、「欧米で無線放送
をやつとるが、誰もまだ聞いたことがないからやつてみる。」と云われて、あ
わてこんで、まあその時の真空管というものは、今からみれば、それは実にチ

ヤチなもので、インチキな様なものなんです、色々集めて、そして組立て、放送も受信も両方組立てようやく出来上った。そしてやったんでありますが、何もかもヤチなもんだから、しゃべるとどうもはつきりわからない。蓄音器をまわすと、ようよう、うまく聞える。蓄音器なら単純ですから、あ、云う様な弦楽的なものと良く聞えるのですが、音声などは仲々明瞭に聞えない。まあ、弱ったけれども、六月十八日午後一時ときまっておるんですから、もう二、三日前から大騒ぎしてやったものです。電気教室の内で電波を出し、受けるのは今の大讲堂で受けるので、大きな声を出せば聞える位の距離です。それが仲々いかん。結局いったんです。それで、市民多数来ておった人々に聞いてもらったりしたのですが、その時に来た学生が、誰だったか忘れたけれども、「先生、仲々デタラメなもんですな。」というが、しょうがない。真空管だつてろくなものはなし、確か日本無線の真空管を使った。ところが、その学生が卒業して通信所に行ったら、今度は、津軽海峡で無線の実験をするから、お前行け、と云われて行ってやったら、私がやったよりまだ変なものであった。それで、「先生、あれ聞いた時には、馬鹿にしておったけれども、やってみるとうまくいきませんな。」というわけで、何でも青森から船が出ると、陸の方から船が何キロ・メートルまで行ったかという試験をする。そのときや、こしいことを云うといかんから、「本日は天気晴朗なり。」と云うことだけしか云わなかった。他のことを云ったらや、こしいから、「本日は天気晴朗なり。」ということだけが聞えるか、聞えんか、それだけを試験するんだと云ってやりました。それで、「本日は天気晴朗なり。」というのはあの時から出たのです。今でも時々やります。で、その人が私のところへ来てくれて、「先生、人がやっているのを見ると何でもい様だけど、自分でやってみるとえらいもんですな。」と云われたのを覚えております。今から三十四、五年以前のことです。で、真空管もその時は、いゝ加減な幼稚なものであって、それでしかも、短い波長なんか真空管では、むろんない。極超短波というようなもの、ミリ波とか、短い波長がどんどん出る様になって来、何でも出来る様になり、そして又おまけに、トランジスタなんて、真空管でない様なものが出来る様になって来ましたが、真空管それ自体が、私が大学を卒業したあとではじめて生れたんであります。私共が大学を出たのはその五、六年前なんです。しかも二極管が出来たのが一九一四年ですから、それからあと、づつと発達してくるの

は大分遅れてからで、あれを自由自在にこなす様になるまでに大分年数がかゝる。今度の戦争のはじまるころ、昭和十六、七年という頃でも、まだまだいかなので、今日からみれば、無論そう大したもんじゃなかったんであります。が、それが進歩して来ると進歩したあげくに、今度はもういらん様になっちゃう。あれだけえらいことをやった。真空管が生れたために世の中がひっくり返ったと同じことで、電波とか電子工学と云うか、何と云うか、そういうことは私共の学生時代にはなかった。習わなかったことが、真空管が生れてはじめて発達したのであり、同時に世の中の文化と云うか、人間の生活と云うものを、ひっくり返す程、どえらい効果を及ぼしたのみならず、他の学問にも非常に寄与した。測定の方法やなんかでもって非常に寄与した。その真空管ももう古くさくなつてしまつた。新しいトランジスタやなんか盛んに生れて来たと云う。その変化は実にひどいもので、私共の様に年をとつた者からみると、もうそれは感慨無量と云うどこじゃないんで、たまげる様な進歩発展なんであります。それから、この間も一寸そう思つたんだが、阿部さんの話を聞いていて、そう思つたんだが、私が大学の教授をしていたのは、昭和二十年までなんで、それまでの学生の方にいらんことを云うたものであります。その一つに例へば、磁気材料には μ のベラボーに大きいものがある。ところが五とか七とか一〇とかの μ のものはあまりないが、大変大きな、何千という μ というのが鉄鉱にある。ダイエレクトリック・コンスタントのKは一〇とか五とか云うやつはベラボーにあるが、うんと大きなやつ、数十、数百、数千と云う様なものが一つもない。丁度 μ とKとを比べてみると、孔があいてうまくコインサイドしない様になっているので、これを両方ともずつとコンティニューアスに行く様なものが出たらえ、んじゃがなあって云う様なことを、しばしば私は講議の時に云うたと思つてあります。もう少し中間のやつも出て来るし、Kの方も大きなやつが出てくるしするとえ、んじゃがなあ、何とかうまいこといかんかなあ、という様な泣き事を毎年数回繰返して学生に話した。覚えておられる人もあろうと思う。ところが、そういう難しい問題すら、今日ではもう既に実用化せんとしつゝあるのであって、それが阿部さんのもっておられる例のチタン酸バリウムなどを、うまく使うとKのやはり、二百、五百という様なものが出来ると聞いて、これも又感慨無量と云うか、何か楽しみ多い事だと思つてあります。そんな様なことを考え考えしていると、いくら学生に教えなくたつ

て、自分でやると云う、能力と意気込みさえあれば、何でもやれるし、又そう
でなければならん。学生時代に何ぼ考えてみたって、先生がかんかんになって
やってみたって、十年後のうちになくなってしまう。なくなってしまうん
ら、もうその辺でいゝ加減にやっておいて、それよりも先に伸びていく素質を
作るということに、教える方も、教えられる方も、やった方がいゝんじゃない
かと思うんであります。

それから、京都大学の学風と云うか、何と云うか知りませんが、今はそうじ
やないんじゃないですが、私共が大学で教授をしている時は、よく卒業生からや
っつけられたものですが、「京都大学の学生は引込み思案で、消極的で、もう
一寸元氣を出して、悪く云えばヤマコをはると云うか、ハツタリをやる様にな
らにゃいかん。」と云う様なことを、東京に主として居る卒業生から云われ
たんですが、今はどうか知らんが、今はそんなことはないかも知らんが、私共が
在職中には、よく云われたものです。これは色々の考え方があるんであります
が、京都大学というのは、京都と云う土地柄からみると、どちらかと云うと田
舎なんです。田舎と云えば色々あるが、私共の云うのはいゝ意味の田舎なん
です。何でも遅いのです、京都は。耳に入るのも、見るのも。東京や大阪はす
ばしいです。熊谷さんが居られるけれども東京や大阪はすばしいですね。何
でもペンに耳に入るし、目につく。ところが、京都は一寸遅れてでないと聞
えてこなんだり、見えたりしないんです。これが良いか悪いかと云うことにな
ると、これは又大変難しいんですが、私はこれを活用していかなきゃならん
と思うんです。良いか悪いかは別として、これをうまく使いこなしていかな
いかな。で、幸い我々の先覚者はこの点を注意されたらしいんであります、
京都大学の学風というものは、それから出て来ていると思うんです。でづつと
みていると云うと、京都大学の学風と云うものは各学部を通じて、どの学部
でもどちらかと云うと理論的に本質、学問的に本質をついて行こうと、法学部
もそうであり、文学部でもそうであります。本質的に学問の本質をついて行
こうというのが京都の学風になっていっていると思います。電氣も無論その流れを汲
んでおるんであります。で、まあそういうことを私も及ばず乍ら見て来たんで
あります。流行を追うてはいかんと、流行を追うたり、実用的なことを主眼に
して物を考えては京都はついて行かれない。なにしろ、耳に入ってくるのも、
目に見えるのも遅いんだから。こういう落着いたところなんだから、そういう

ことを目当にしては負けるに決っているし、不便に決っているんだから、どこ
までも学問の本質をついていくと云う考え方で行かなければいかんと。だか
ら、悪く云えば、流行を追う様なことを全然止めて、そして何代も何代も、教
授が三代も五代もの間でもいゝ、何十年の間でもいゝ、その間一筋に同じ様な
系統の学問を受け継ぎ受け継ぎして進んでいくと云うのが、京都では心がけら
れねばならぬ問題である。他もその様です。法学部でも文学部でもその様であ
りまして、電氣と云えどもやはり私は同じだと思います。そうすると、多少世
間の人が見て迂遠だと思ふ様なことが或はあるかも知れない。けれどもそうい
う風な考え方で行くならば、必ずその実力と云うものが、基礎は、足もととし
っかりするに違いない。だから少々厄介な問題にぶつかっても応用の力はう
んとつく筈なんです。世間からみて迂遠だと云う風にとられるかも知れない
が、その迂遠だととられるのがむしろ良いんじゃないかと云う様なことを、そ
の学生から云われる時に云うた事があるんであります、その後もうあるべ
きだと思ふんであります。まあそういう風なことで、色々先生方、教授の
方、大いにやとって下さるんで、それで京都の学風と云うものがちゃんと立
ち、そして又実力が出、業績も又上って、今日の電氣教室の隆盛ということに
なつて来るんだと思ひます。シタバタしとてはいかんの、やはり土地柄落
着いて本質をついていくと云うことでなければいかんと思ひます。

それで或いは又後になり先になりするかも知れませんが、電氣教室が発展し
てくる六〇年間の三分の二位来たときに今度の戦争が始まったわけなんであり
ます。戦争はとにかくえらい戦争であつたんで、学生諸君は良く知らなかつた
だろうけど、今日の相当の年輩の方々は、色々な意味で深刻な体験を積まれた
と思ひます。私自身としまして、この戦争による体験と云うか、何と云いま
すか、被害と云うかは、大学の職員としては最も受けた一人であると思ふん
であります。おそらく私の生涯において、戦争及び、戦争の後の世の中の移
り変りと云うものは忘れることの出来ない、良い意味でも悪い意味でも、うん
と色々のデータを持っていくつもりなんです。戦争がすんだ直後にマッカー
サーが上陸して来たのが九月であつて、教育に関する指令を出したのが十月の
終りであつた。つまり、云いかえたら、日本が戦争に負けて占領されたため
に、占領軍が一番力を入れ、一番眼目をおいた大きな施政の中で教育問題が一
番大きかった。マッカーサーは何よりも先に教育に関する指令を出すし、これ

に最も大きい力を注いだ。従って我々がそれから影響を蒙ると言うことが非常に大きいのは当然の事なんです。この事について話し出せば、何時間話しても種は尽きませんし私は戦争後における学校の学制の改革とか何とか云う問題はイヤと云う程データを持って居りますが、こんな事を云うことは必要ありませんので申しませんが、昭和二十一年の一月に、早速一番先に、教育使節団と云うのが日本へ来た。三十何名の使節団と云うものが日本へやって来たわけであって、これに我々が加わって、連日会議をして六月までヤッサモッサやっただけであります。交通の不便な時、そして石炭のない時、震えながら雪の中を往復してこの使節団と折衝したんでありますが、一月に来て三月に帰ったんですが、その三月に帰るまでに、もう大体の日本の教育改革と云うものが骨子が出来ておったのであります。その骨子が出来上ってから、その骨子に沿って、今度は日本だけで委員会を作って、それが又二年も三年もかゝって作り上げたのが今日の教育に関する法令なんです。すべてがそういう風な順番で出来て来たわけなんです。その中で色んな話がありますけれども省略しまして、その結果日本に大学というものが、今日の様な制度になって、六三三四という制度が出来上ったんでありますが、これをやるときに、アメリカさんが帰った後で日本人だけで委員会を作ったその時の委員会では、そもそも随分色んな議論が行われたんであります。こう云う制度を採用すべきかどうかと云う様なことから、根本的に教育勸語の問題からなんから、ことごとく審議されたのであります。結局こう云う風なことになってしまった。で、こうなってしまうことの是非、良し悪しを今更論じてみてもこれは何ともいたしかたが無いんであります。特に教育に関する問題は他の問題と違って、今云うて改正をして翌年から効果が出ると云うもんじゃありません。準備に数年かゝり、後で又結果が出るのに数年かゝるものなんで、今更これに手をつけてみてどうだこうだと云って見たところで、これは混乱をするだけのことであって、少しも良い結果が得られない。それはもう確かであります。この制度そのものが悪かったと云うよりは、この制度を実行するのに準備が足りなかったと云うことが今日の悪い結果をきたしている大きな原因であろうと思っております。昭和二十四年から実行に移した。これがいけなかったんであります。昭和三十年頃かうと云うことにして、四、五年間の準備期間をうんとおいて、そしてやる人の頭も、それから金も施設もことごとく準備しながら順次やって

くれば、これは必ずしも悪い制度ではなかったと思うんであります。そうせずに唯いきなり上から下まで全部を同時に切り換えてしまった。しかも何も用意もなしに、頭の用意もなし、設備の用意もなしに勝手に切り換えたという事が非常に悪い結果になったんであって、もしこれを十分な余裕をおけば、けっして必ずしも悪い様にはならなかったと思うんであります。で、これはどうにも仕方がない、仕方がないが今申上げた様に、これを替えようとしてみても、今度は又替えるのに数年の準備をおかないと、この前しくじっているんだから、替える時に又ボカッと替えたなら混乱するだけの話なんで、もしするとすれば、やはり数年間のゆとりを置いて替えていかないと、私共は自分がこの制度を決める時に参画した立場から考えて、非常にその点を思うんであります。まあ悪けりゃ悪いで替えなくちゃあならんが、替える場合にやはり徐々にゆとりを持って替えていかなきゃならんと思えます。で、制度そのものを礼讃するわけではありませんが、これはそういう風なわけで出来たわけが出来たのでいたしかたない事でありまして。その問題について一つの笑い話と云うか、まあ笑い話と云うと一寸おかしいけれども、一つのことをすっぱ抜いてみたいと思えますが、日本に今大学が沢山出来て、駅弁大学とか云う名前になって到る所に大学が沢山ある。この大学が多すぎるという事が昨今随分問題になっている。おそらくこれは事実である。ヨーロッパには大学というものは、ヨーロッパ全体でもってよけいありません。ヨーロッパ全体で七〇か八〇しかないと確か思うんです。ところがアメリカには千五、六百大学というものがあつて、シニア・カレッジを除いてユニバーシティ或はカレッジというものが千七、八百か二千近くあるんであります。ヨーロッパとアメリカとが非常に食い違っているんであります。これは物の考え方が違うんだだけであって、アメリカとヨーロッパで大学に対する観念が違うわけじゃないんで、同じなんだが、唯一寸形が違った様にみえる。というのは、ヨーロッパでは大学と云うものは、ある一つの基準を決めて、その基準に合わないものは大学としないのであって、大学と云うためにはある一つのはっきりした規則というか、標準があつて、それに合ったものだけを大学と称するんであって、それ以外のものは大学と云わせない。云わせないから数が少ないんであって、云わせたら何ばでも出来てくる。アメリカはそうじゃなくて、勝手に云わせるんです。アメリカには大学に関する何もないから、自分で大学と云いたければ勝手に云ってよろし

い。理髪屋でも大学と云うてよろしい。理髪大学と云っていゝんです。一向にさしつかえない。勝手に云わせるから何ぼでも大学が出来るんであります。千から二千になる。ところが、アメリカは、云わせると云って放ったらかしにしておくのかと云えば決してそうじゃないんで、その内にまた自ずから自治による、上から政府が云うんじゃないんで自治によるグラディエーションが出来ているんであって、例へば、何とか協会、何とか大学協会と云う様なものがあるとそこへ入れない。入ったのが才一流の大学である。仲々審査が厳重で入れない。その大学の協会に入って居る才一流の大学は四〇位しかないんです。やはりアメリカでも四〇か五〇しかないんです。だから名前は勝手に云わせるけれども、実質的に敬意を表される大学というものは、やはり四〇しかないんです。ヨーロッパもアメリカも同じなんです。ところが日本では、一寸審査を受けるけれども、簡単な審査で、大学という名前をつける。名乗ったら同格だと思ふ。日本では。それが間違いないんであって、名乗っても大学はグラディエーションをつけなきゃいけない。日本ではそれを付けようと思ひない。だから妙な話になってくるんであって、私は絶えずそう思ふんであります。学部というようなものでも、日本の大学の学部というものは、それはヘンチキリンなもので、こんなものは学問的に云うと間違っています。理学部、工学部、農学部なんて云う学部は、これは又突飛な学部です。これは間違です。これは私自身の意見で、世間で通用しないかも知れませんが、生物学部、化学部とか、物理学部とか云うのが正しいと思ふんであります。物理学部と云うものの中には、物理もあるし数学もあるし、電気、機械、土木、なんか入っちゃう。それから化学部という方へは理学部の化学も、農学部の化学も、工学部の化学も入っちゃうと云う様な風に分けるべきなんで、農学部、工学部とかいう分け方は突飛な分け方であると思ふんであります。アメリカはそうではないが、それに似た様に、日本の様に理学部、工学部なんてこと云わずに、実際に多少でも合う様な名前をつけて居ります。ところが日本ではそういうことすら考えない。東大や京大が昔から理学部、工学部と云うからと云って、新しく出来る大学までが理学部、工学部とおっしゃる。これは非常な間違いだと私は思ふんであります。新しい大学を作るんならば、少し新機軸を出して、正しい理論的な構成を考えるべき筈なんで、だのに今もって新しく大学を建設するのに理学部だけの農学部だのという名前ではじまると云う様な事は、これは私は気に喰わ

ん。そういう考え方は間違ひである。だから大学が沢山あることは結構である。駅弁大学でもなんでもよろしい。結構であるが、その内に自ら使命というものを心得て、グラディエーションをはっきりつけなければいかん。そう思ふんであります。ところが、そのグラディエーションをつける一つの方法が、大学院を置くか置かんかという問題でからんで来るわけなんで、大学になったならば、日本全部の大学が大学院を置きたい。これが又困ったことなんで、全部が大学院を置くんなら日本はつぶれちゃうんです。要らんことである。大学院を置くのは極く少数でいいわけなんで、アメリカにだって、大学は千いくら、二千近くありますけれども、大学院のあるところが百九十八かなか、私の記憶では確かそういうもんであって、二百ないんであります。日本では皆置きたがる。それを占領中に、あの有名なしくじりをしたドクター・イルスと私は議論をしたことがあるんであります。で、ドクター・イルスは日本に大学を沢山作って駅弁大学をつくって大しくじりをしたと云って逃げて帰ったのであります。その日本でまだ仕事をしておった時に、京都へよく来て、私共わりに仲良くしておったのです。良く来て私の家で食事を一緒にしたりして、度々話をしたことがあるんであります。イルスは「どうも日本で大学を作りすぎて困ったことになった、こんなに大学を作るなんてことは俺は毛頭考えていなかった。えらいことになってしまつて困つとるんだ。君、なんとかこれ減らす工夫はないか。」と云うわけなんで、何故そいふたかと云いますと、彼は人の良い結構人としてね、何にも策略のない人なんで、日本へ来ていきなり、私が憶えているのは暮の十二月でしたが、昭和二十二年か二十三年の暮の十二月でしたか、彼が東京へ着任するなりすぐ声明を出した。その中に、日本では大学は十あればいい。日本には総合大学は十作つたらいいんだと云うことを発表した。で、十以外のものはすべて地方移譲すべしと云つたんです。その十ちゅうのは何かと云うと、七つの帝国大学の外に三つの大学を新しく作つてそれを日本の総合大学十にして、それ以外のものは全部地方移譲ということを軽卒に実に軽卒に云つた。おさまる筈がないです。医科大学が岡山とか新潟とか千葉とかあるし、東京には工業大学だ、文理科大学だ、一ツ橋大学だというものがある。これを地方移譲しろと、これはおさまる筈がない。大騒ぎが始つた。私、丁度東京に居つたんでその騒ぎに入つたんですが、さあ、えらいことになつたと云うんで、度々会議を開いてやつたが、一ツ橋や工大がいきり立つて、

そういう馬鹿なことはないと云うんで盛んにやった。丁度議会の開設中なんでありまして、政治問題化して非常な騒ぎになってしまった。そこでイールスもびっくりしちゃって、えらいことになってしまったと困ってしまった。それから何か收拾策を講じようとしたがどうしてもいかん。各方面から盛んに運動が行われてくる。例えば三つ大学を作るのは、イヤ熊本におけ、岡山におけ、金沢におけと云うわけで、代議士やなんか押しかけて運動するということになって、おさまりがどうしてもつかん様になってしまったんで、何やかや押問答したりして半年程もんだ拳句に、イールスがとうとうかぶとをぬいじゃって、各府県に全部大学が欲しいらしいから、一つづつ各府県に大学を作ったらよかろうと云っちゃった。ところが又それでもいかんわけで、東京、大阪、京都になると二十や三十もあるが、それを何とかしてまとめようと云うんで、イールス又大分骨をおったです。例えば、京都へ来て、僕らに府立医大も工芸繊維大学も、すべて京都大学に吸収出来んかという様な話を持って来たこともあるし、まあ、いろいろとヤツサモツサしたけれども、結局いかんということになってしもうて、今日の様なことになった。それはイールスが、アメリカ人が悪いんじゃないくて、日本人が悪いんです。ということをお私に云いたい。つまりいの方は一〇あつたらいいと云っておった。それを日本人がこんなに多くしてしまった。しかし、そんなことは今更云う必要はないが、まあそう云えるんであります。そこでイールスは帰る前に私の家にやって来て、「大学院をせめて少数、十か十五にしてくれんか」と云った。「俺にしてくれんかとは何だ。君がやるべきだ。俺は何も権能もなければ、何の力もないし、何でもないんで唯一人の市民である。それに大学院を十五にしると云ったって、そんな馬鹿なことではない。君が今までしくじって大学を二〇も作ったんだから、大学院を十五にするなら君がそれをして帰れ。」と云ったら、「いかん、わしはもう出来ん。」その時に、国立大学は君が云う様に十か十五に出来るけれども、私立大学は絶対に押えられん、だから仕方がないと。しょうがないと。こういうわけなんですけど、まあそれで国立は押えられて居るわけなんであって、国立大学は七〇いくつかありますが、大学院のあるものは十八かそこらしかない筈なんでありまして、そういう風に押えられております。けれども私立の方はおさえられるわけにはいかん。ですからいくらでもふえていくんであります、まあこれが今度の学制の問題についての一つの内輪話であって、このイールスは帰りは

シヨボシヨボと帰っていったんで、はじめは相当の意気をもって来たんで、イールンの前任者は、リグリフォールスという人で、これは今ニューヨーク・ユニバーシティーのコマージュナルの学部長をしてるんで、これは立派な人で、このリグリフォールスはイールスみたいに軽卒に物を云わない、自重した慎重な人であつたんで、この人が長くおつてくれれば良かったと思うんであります。リグリフォールスはすぐ帰ってしまつて、イールスが来てこういう風になった、というのがイールスとじかに私が話したことなんで、こういう話はあまりしてありませんが、もう時効にかかっておると思うんであります。してもいいと思うんであります。そんな事で今日の様な大学の状態になって来たと思うんであります。まあ、しかし、日本の国のためには、大学が沢山ある方がいいんだし、誠に結構なことなんで、卒業生が何ぼでも売れるそうですから結構な話なんですけど、しかし時々私は、大学が多すぎていかん、私が何だか悪者であつたかの様にやられることがあるんで、その云い訳の為に今云つた様な話を時々するわけなんであつて、皆さんにたいいていの人が多すぎるとおっしゃるけれども、実はそういう風な裏話があるんだと云うことを知っておいて戴いて私共が悪いことをしたんじゃないと云う風に許してくれなくちゃ困るんであります。

最後に、電気教室は明治三十一年から始めて、はじめは、今の向うの石油化学やなんかのある、本部の時計台の向う側にある赤レンガの建物あの中でコチコチやっておつたらしいんですが私も知らない。その時には教授も殆んど居ないんで、難波先生が来られて、それから水野敏之丞先生が物理と兼任で両方やっておられた。向うの建物で小さくやっておられた。それからこちらへ移って北半分だけが先に出来て、その時にはもう小木さんが確か来ておられたと思えます。小木さんと云う人は面白い人で大学の教授は二、三年ですぐやめられた。今の若い人からみたら実に珍しい様な立派な人であつた。私の聞いた話じゃ「わしら教授には不適任だ。わしらみたいな奴が大学の教授をしとつたらいいかん。」と云うてすぐ止められたと云う。石川さんの奥さんのお父さんで、そう云うことを云われ、本当か嘘か知らんが、そういうことを皆が聞く程、損得・名聞を考えない立派な人格者であつた。そういう教授が長くやっておられたら、学生も随分鍛えられたと思うんですが、やめていかれてすぐ京都電灯の技師長になられた、これはそういう話が残っている程恬淡な人であつたらしい。それから青柳教授がそのあとに來られた。はやく教授になられて電気教室

の興隆の爲には非常につくされた。恐らく電気教室の開設当初から居られた人で、一番教室の発展に努力され、効果を上げられた先生であろうと思うんであります。それから小倉という教授が居ったと思うんであります。これも長く居ないで、十年も居なかった。本野教授がその次に來られたのであります。本野さんが教授になられたのが、私共が大学を卒業してからなんで、私共の大学に居る間は、三教授三助教授で、野田さんなんかその時助教授で居られたわけなんです。極く小さな教室であつた。で、私共が出た年に本野さんが、才四講座が増えて、教授になられて、昭和十三年までか、長く教授としてつくされた。やはり青柳さんと一緒に教室の発展に努力された方なんであります。その当時は今とは大分違いますんで、世の中に実際に仕事を為す為、世の中を良くする為には、色んな階級の人なり色んな種類の人が要ると、大学の卒業生だけでいくら頑張つてみたつて、その下に働く本当の眞面目なついでいく人が居なければならん。と云うので、電気工学講習所と云うものを、青柳さん、本野さんお二人の努力、功績なんです。これは夜学なんです。中学を卒業した人を集めて夜講義をする。教室の人や会社の人なんか、皆んな夜講義に來たものです。丁度電気教室の前の松原、今の文学部の建物、木造の建物がある所に、電気工学講習の建物を新築して、そこで夜講義をしたもんです。これは入学は楽で、入学試験をしないで皆さん誰でも入れるんです。この講習所が京都大学の昔やつとつた、進歩した科目制度を長い間受継いでおつた。講習所が京都大学の良いところを受継いでおつて、学校を二年なら二年やつたら、外へ出て働いて、受教簿みたいなものをもって試験を受けに來て、卒業していいということになつておつた。講習所は入学は楽で、そういう風に科目制度になつておつたんで、例へば百人入学されても、二、三十人しか卒業されんです。全く自由なんです。その講習所で学ばれた方が随分多いんです。これは青柳さん、本野さんのお仕事であつた上に、我々もお手伝いさせられて、随分苦しめられて講義したんですが、その卒業生が随分沢山あるわけなんです。今日その人達が随分おると思ひます。その講習所の出身の方で大いに社会的に發展された人が実に多いんであります。で、色々やつておるうちに、青柳先生は停年で止められる、本野先生が又停年で止められると、その次に講習所の世話を私がやらんらん様になつたらしいです。年の順から云うと。私は嫌いなんです、そんなこと一寸性に合わんのです。どうも受継いでいて先輩の

やられた仕事を汚さないで保つていくことは私には自信がなかつた。なかつたから、悪かつたけれども立命館へ売つたんです。売つたと云うと語弊があるが、その当時の立命館の総長をしておつた、中川小十郎氏が、「工学部を作りたい。作りたいがポコンと作ると仲々出來ん。金もかかるしうまいこといかん。何か種が欲しい。ニュークレアスが欲しい。」ということをしきりに云われて、私に講習所を譲つてくれんかと、何か社団法人か、学校法人になつておるものだからその種が欲しい。そこで色々相談して、私の独断でやつたわけではありませんが、先輩にも相談しましたが、よかろうと云うことで、大いに發展する為に立命館に譲つたわけです。それが立命館の高等工業学校になつて、途中で日滿高等工業学校になつて、づつと榮えていつて今日の工学部は、青柳、本野さんのやられた電気工学講習所が發展していつたものなんであります。まあ、それは今日になつてみれば非常によかつたと思うんであります。あれが今日までこの大学に残つていたら、大学に相當な迷惑をかけ、トラブルを起し、そして又年度の学制改革でどうなつたか、或は跡かたもなく消滅してしまつたか、野たれ死にしてしまつたかわからんと思うんであります。戦争と云うことを考へて、この講習所の処置は、私は偶然ではあるが良かつたと思うんであります。もしあれが私の手にそのまま来ておつて戦争になり、戦争が濟んで、こういうどえらいどさくさという様なことになれば、大変なことになつたんじゃないかと思つてあります。で、講習所の卒業生で今見えておられる方も或は私を恨んでおられるかも知れないけれども、自分の母校をなくしちゃつたと思つて居られるかも知れませんが、私はそれは思わないんで、あの処置は偶然ではあるが、あれで良かつた、とにかく立命館の工学部になつたんだし、ちゃんと終りをまつたんだし、残つておつたらみじめなことになつたんじゃないかろうかと、おそろくこの京都大学ではあれは置いてくれなかつたらうと思つてあります。適當な時に、適當になつたと思つてあります。

それから、電気教室の初代の教授であつた青柳、本野教授の時代を経て、清水教授がしばらく居られたが北海道へ転任され、大竹教授がしばらく居られて大阪に転任されていつた。その次に年をとつたのが私なんであります。私はおかげで、皆さんの御愛顧を得て四十年もの長い間大学に居つて、最後まで終りをまつたとして、この講義室へも久し振りに、十何年振りか知らんが入

って大変喜んでおるんであります。それから岡本教授が私と前後して、やはりこの教室で大いにやられて、特に熔接方面でのこの教室の発展の為に努力され、大きな功績を立てられたのであります。それからあとは皆さんの御承知の通り、松田教授、阿部教授、加藤教授とが教室を去られた。大学の開設以来、電気教室を去った教授は十二名になんでありますから相当年とった教室と思うのであります。そのあとを継がれた人達が又、皆んな立派な学識徳望の高い方々日本の大学の電気教室の中で重きをなしておられる方々が揃って居られるので、私共非常に安心しておる次才であります。こういう過去を教えてみると、これから将来は若い人達が沢山出ておられるし、先程いらんことを云って、大学で私共何も習わなかったと云いましたけれども、今の若い人は時間が足りない程習っておられるんだからもっとまだまだ偉うなられるに違いないから、大いに期待して居るわけなんです。一つ教室のためによく御努力をお願いしたい。(文責在編者)

老会員から若い会員諸君へ

明三七 多田耕象

(東京電気工務所取締役)

結論を先きへ挙げれば「経営者として世に立ち得る素質を持たれる諸君は或時期からは経営に関する勉強をもせられては如何」と言うことです。

私のことを申し上げ恐縮ですが、実は私は社会に出てから私と一所に働いて下さった若い諸君に「しつかり勉強しないでは時勢に遅れる」と口癖のように言つたのですが、而し私の考は専門技術に関する勉強と言うことに限られていた。経営者たり得る素質を持つと思はれた少数の諸君に経営者としての勉強も必要だと私が勉めるようになったのは多分昭和十五年以後のことであつた。

一昨年秋欧州視察から帰られた電力中央研究所研究主任(洛友会員)上之園親佐君から「シーメンス工場の研究部では採用した技術者を幾年かの後にはその人達の性格に応じて技術に進むべき者と経営方面に進むべき者とに区分し、夫々に相当する教育をもし業務に当らせているし、有能なマネジヤの居る部門のみが優秀な業績を挙げて居る」との意味の話を聞かされ、私の若い時私と一所に働かれた諸君に対して私の採つた前記の話をして懺悔したことでした。又

近年発達しつつあるオペレーションズ、リサーチに就てもその開発なり運用は事務系の経済学者にやらせるよりも、数学の力はあるが而かも関連技術に就て広く且深い智識を持つ技術者に当らせることが遙に効果的であろうと私は思います。

それで、技術者の多数諸君が各専門技術の進展の為生涯を捧げられていますことは社会國家の為絶大な貢献であることは勿論であります。一方将来経営方面へ進み得る素質を持つと考へられる(自己判断文では危険、先輩の公正な認定をも乞はれたい)諸君は学窓を出て少くも五年十年或はそれ以上も専門技術に就て充分勉強せらるべきは勿論であるがその後は余力を経営者としての勉強にさかれては如何かと私は思う。但しこゝに特にお断りすべきは「既に経営の智識をマスターしたから(経営者は智識丈ではだめだが)必ず会社重役になれるなどと考へ」られては大間違いである。役員の数僅少である。而し諸君が社会に出られて年数を経るに従い次才に事業の経営に関与せられることゝなると思ひますので経営の修業をしておかれることは必ずや有効であろうと思つては。上之園君の言はれた通り、如何なる事業でもそこに有能なマネジヤの居るか否かがその事業の成衰を支配します。

序ながら将来経営者たり得る若い諸君を良くご指導下されますよう、若い会員諸君を預っておられる先輩会員諸君へ切望申し上げます。(三三、一〇、一五)

五十八年間の思い出

明三七 吉田二郎

(大東アルミ熔接所長)

私が入学したのは明治三十三年で創立六十周年に近い年月を経て居るため今懐旧談をすることは誠に悦びに耐えない次才である。

私は入学のとき木下総長の面前で自署宣誓を行い紳士の資格を与えられ、五十八年を経過した今日に至るまで尚其の資格を保持して居る。速い昔のことであつたという思いもする。

人生は二十五才で発育期を了え百才で天寿を完うすることになって居り、生れた以上は誰でも一定の発育期を有し天寿に達して終るといふことは生理の原則であつて、我々同輩の入学当時に於ける発育期間は、二年の差はあつても

同じ様に發育したと思うが、六十年を経た今日に及んでは大部分の同輩は既に去り、うたた愁歎の情に耐えないのである。斯く健康上の個人差のあることは考えて見ないわけにいかない。私は今年八十一才になったが、毎日の食事は七十五才の栄養基準量千九百カロリを摂り、必要栄養分は完全に近い様に摂って居る。そして摂取したカロリを完全に消費するために就床時九時間をとり、朝夕の動作の外に一分間に四・六カロリを要するラジオ体操より軽い労作即ち一分間に二・五カロリを要する骨折運動を四時間ずつ行い、此の運動のために六百カロリを消費して居る。即ち計算上摂取カロリ千九百其の一割を引いた千七百十カロリに合う様に実行して居る。此の様な日々を繰返して居るのだが変化のある元気に就て考えて見度いのである。殊に睡眠に依って元気が回復するというのを電気学的に解明することを私の構想として提案して見たいと思う。摂取したカロリを我々が思う通りにダイナミカルエネルギーにするには、ある人はダムを堰止める様な方法だと考えて居る程度で現在のところは壁に衝き当って其れ以上進むことが出来なくなつて居るのである。茲に至つて細胞中に起つた電気を如何にするかということが我々電気屋の領分になつて来た。其の電気屋は電気学の本を読んだだけでなく電気の実験測定をやつた人で始めて出来ることだ。私は幸いにも五十七年の昔関野先生及び斉藤さんから試験器を借りて実験をやつたことを思い出し、五十八年後の今日に至つて役立つことが幸運だと思つて居る。熱エネルギーは酸化作用で電気エネルギーとなつて其の電気が電解還元能力を持つ電池に蓄電され必要に応じ放電されダイナミカルエネルギーとなつて現われる。其の電気回路に於てスイッチが必要である。其のスイッチは神経と連絡して意識神経又は自律神経の命令に依り思う通り働くことが出来るのである。此の重要なスイッチはどこに求めるかというに此れは神経の通つて居る蛋白質であつて、コアゼルパートである。コアゼルパートは時に依り半溶半硬の状態を微妙な働きを持つて居るものである。オパーリンは生命合成の課題を研究して居つて蛋白質のコアゼルパート滴が生命の起源であろうということまで言つて居る。此のコアゼルパートはレオスターにもなりスイッチとして最も都合のよい存在である。元氣と健康とはどう違

うかを考えて見るに、活動中諸器官が順調に働けば健康であつて、ある期間は変らないものである。元氣は健康であつても変化がある。元氣はエネルギーが充分蓄電されたときに旺盛な状態であり、使えば放電されエネルギーが無くなるから衰えるので、眠くなるということは蓄電量が無くなったことを暗示して居るものである。睡眠は最も効果的な蓄電方法である。脳の栄養はグルタミン酸とビタミンB群に依つて生ずるところのガンマーアミノ酪酸が主なる要素である、之れを充分に補給すれば元氣が長続きする。(三三、一一)

六十周年記念に際会し想出のまゝ

明三九 岡 村 金 蔵

懐しい吾母校の電気工学教室が開設せられて、六十周年の歳月を経、其卒業生二千四百余名に達し、全国に散在して各種の方面に活躍して居られるは、誠に芽出度く喜に堪へぬ次才で有ります。

私は明治三十五年に入学した者で其當時を追懐し今日の盛況を觀て今昔の感に堪へませぬ。私と同時に入学した者は僅に十一名でしたが、不幸にも皆他界し生き残つて居る者は私独りで寂莫の至りであります。

私等の入学した頃は入学試験の苦しみも無く呑気でした。また入学式も無く受教簿と云うものを渡され三ヶ年間に修得せねばならぬ必項科目の試験にパスすると其の都度担任教授の認印を受け、全部の認印が揃うと論文を提出し、試験に合格すると何時でも卒業証書を交付せられ卒業した事になるのでした。其頃は今日のようにラヂオやテレビが有るでなし、外に出ても映画とかダンス、カフェー等の、享樂機關が有るでなし今から見れば嘸ぞ寂しかったらうと思はれますが、其當時はそれで別段寂しいとも思はず学生気分が満足して居つたもので、休日午後の郊外散歩や比叡、愛宕の登山、嵐山へのクラス会等は楽しき思い出であります。

私等の卒業した頃は発電所機械の如きは一式外国に注文したもので、先方から送つて来る青写真とインスツラクション・ブックに従つて、据付けするのが唯一の仕事であつて、場合に依つては先方の据付技師迄雇ひ入れたもので、パブコック、ボイラー、マッキントッシュ、エンヂンが代表的のもので、ぼつ／＼

スチーム、タービンが日本にも来始めましたが、五百キロ・千キロ位が最大のもので、今日国産機で十萬キロを超す大容量のものが造られる事を思うと隔世の感が有ります。

私は齡既に喜寿を超へ敬老会に招かれ碌々余生を送って居る始末で、電気界の現状は一向判りませんが、終戦直後滿鮮、台湾等の活動舞台を失い、是に反し駅弁大学と云はれた程大学が多く出来、卒業生は如何にして職に有り付けると悲觀しましたが、其後国内産業が盛り返して来、電子工業方面にも、新分野が拓け東南亜細亜や南米印度等に至る迄進出し得る機運となり新卒業生の前途々たるものあるを歎び皆様の御成功を見守り度いと思うものであります。

私等明治時代に育ち日清日露の戦役を経て国運隆々たりし跡を見て居るものには、今日の世相に溶け込み兼ねるもの多々あるを寂しく感ずるものであります。一例を挙げれば紀元節の如きは必ずしも歴史的事実の裏付け無くとも、或る適當の日を定め国民の気分を是れに向け国家を想う念を高めさせたら如何かと思ひます。亦今日小・中学校教員の勤務評定に絡んで執って居る行動の如きは納得出来ぬものが有ります。斯る先生に教育せられた学童の将来を想う時は国家の前途寒心に耐へぬものが有ります。少々脱線しましたが嘗々洛友会の益々盛大ならんを希うのみであります。

電気学会入会物語

明四一 野田清一郎

(大阪工業大学名誉学長)

一
我国電気学会で支部を設けて貰い度い、其才一着手として関西支部を設置したいという要望が青柳教授を中心として京阪地区で運動せられたのが私の卒業時頃であつたらしい。それが為めには会員数を増加せねばならぬ。青柳教授は電気学会入会申込書を新卒業生総てに手渡しせられた。それには推薦者青柳教授の名前が書かれ捺印してあり、郵便切手まで添えてあつた。それを私一人だけ受取らなかつた。教室に残って講師を勤める新卒業生が入会を拒避した事になつた。

丁度二年前に外国留学から帰られた東大の鳳教授が書かれた欧米視察報告文

に、英米では電気学会会員の資格審査が非常に嚴重である。学界で相当の業績を挙げた者でない限り正会員としての入会は認められないということが書いてあるのを読んだことがあつた。鳳教授は我国電気学会の幹部ではあつたが入会志願者の資格審査に関与せられはすまいが私の様な無学者が入会を申込むのはどうも氣恥かしいというのが私の心境であつた。

学生の実験実習や電気評論の編集其他教室用務で忙がしかつた上、河合先生、水野先生等の数物の講義の聴講にも行つたので自分の研究に取組むのは苦勞であつた。一年経つてまた青柳教授から新卒業生達に電気学会入会申込書が渡されたが研究業績の上らぬ私は知らぬ顔で過す外なかつた。

二年経つて愈々電気学会関西支部設置の青柳案が成立することになつた。新卒業生にまた入会申込書が配布せられた時私は青柳教授に呼ばれて『君はまだ入会して居らぬ。関西支部も愈々出来ることになつた。京大の助教教授が会員になつて居ないのでは困る。是非今度は入会せよ』とのことであつた。私は其場で『承知致しました』と答えて教授から渡された入会申込書に同封で「弾性カテナリー曲線式に依る架空線の計算法」の原稿を電気学会に送つた。

二

私が米國「コーネル」大学の物理学教室で理研の西川正治君と二人客員教授をして居た頃、教室の「ベデル」教授に京大の難波教授をA・I・E・Eの正会員に推薦して頂き度いとお願ひした。『我國大学の長老教授が米國学会の準会員であるのは恥かしい。是非御尽力を願う』と申上げると『早速考えて見よう』とお答えであつた。当時「ベデル」教授はA・I・E・Eの副会長をも勤めて居られたので便宜が得られるであろうと考えて居たのである。她が何日か経つて教授の日はれるには『我が学会で正会員となるには学界優秀者の推薦が入用なので相談して見たが手がかぬ。君なら何とかなるが米國学界に縁のない人では手のつけ様がない。これが長岡博士、本多博士なら何とでもなるが』ということであつた。『誰れか米國学界人で難波教授を推薦して呉れる人があればよいが、若しあれば一切の始末は自分でまかなつてあげる』と曰はれた。『私の以前承つた所では「エレクトロリカル・ワールド」誌の創設者「ウィヴァー」博士が仏國留學中難波教授と懇意であられたと承つて居ます。同博士に御相談下さらば』と申上げたなら『あの老先輩なら大丈夫、早速自分から打合せて見る』とのことであつた。これが成功して難波教授は終身A・I・E・E

Eの正会員になって居られた。

ウィーヴァー老博士は『ワシントン近くの田舎で風光明媚な所で閑居して居るから是非遊びに来い』と御親切なお手紙を頂いたが留學生の身分ではそれも出来兼ねた。

三

難波教授がA・I・E・Eの準会員であったのは教室の図書係であった私にはよく解る。それはA・I・E・E会誌は教室で是非必要な図書である。それを丸善から買うと高価になる。準会員の少しの会費で手に入れて図書館用に利用したのである。理屈好きの小倉教授が『自分で読みもしない外国雑誌を難波老教授名義で購入するのは面白くない。教室図書係の小僧の君の名前にせよ。入会して教室が受取ることによせよ』とのことで私もA・I・E・Eの準会員になって居た。

それが米國留學中は籍だけは一時米國に移して居いた方が便宜なこともあり得ようと思つて紐育の高田商会支店に籍を移して其所から色々の通知状は自分の住所へ、学会誌は京大に転送して貰うことにして居た。高田商会は米國「ウエスチングハウス」会社の電機輸入商社で教室の西崎先輩が主腦者であり、同級の山田鉦一君が勤めて居たのでよく世話をして呉れた。

「コーネル」大学で或る學生が『この何日かの晩に電氣学会の本大学支部で会合があります。あなたの方へも学会から通知がありませんでしたか』と聞く。私は『学会誌を日本へ送るため便宜上紐育に籍を置いて居るので通知はない。が掲示は見た』と答えると『それはおかしい。学会というものは會員相互の会合が目的のもので学会誌はその歴史を記録したものです。過去のものです。是非今度の会合には御出席なさい』と推められたので出て見た。私は学会というものの真相を米國の學生に教はつたと思つた。

電氣工学教室六十周年に當つての懷古

明四三 石川芳次郎

(京福電氣鐵道株式会社社長)

たしかわたくしが電氣工学科二年に在學中電氣工学教室の十周年記念行事が行われました。わたくしは學生は祝賀会の余興係であつたと記憶していま

す。それから五十年まことに短いという感があるのであります。今回、六十周年の記念講演として鳥養先生の回顧談を拝聴したので昔の思い出が湧いてきました。

◆當時は、電灯はまだ電氣の先生のお宅にも及んでいなかったものでありますから、もちろんわれわれの下宿などでは電灯の下で勉強するなどとは思ひも及ばなかった。これについて面白い話があります。故本野亭先生の結婚式に教授先生方からの御祝の贈物は竹筒の丸苖(まるしん)の石油ランプであつたというのですから、いかに電灯が普及していなかつたかが想像できるでしょう。今こそ光というのは電灯で空気が水の如く普遍性がありますが五十年前は瓦斯灯でさえい沢品とされ石油灯が普通でした。尤も電灯料金も安くなく十六燭光一ヶ月の定額料金が一円でした。この頃の一円の購買力は白米五升でしたから電灯料は大したものでした。

◆わたくしは大正二年欧米旅行から歸つて来て、日本が彼地にくらべるといかに電氣の応用普及が遅れているので、躍起になって光の電化に努力しましたが、當時京都電灯は京都府滋賀県及び福井県で供給電灯灯数二十万灯・電力三、二〇〇馬力しかなかつたのでこの時代における電力の需要の少なかつたことがわかります。今では文化觀光都市を目ざしてありますが、その當時は京都市内に煙突が三千本位あつて蒸氣エンジンの馬力数は一万を超えていました。當時としては水力電氣の豊富であつた京都がこの始末ですから、東北の郡山紡績、静岡県の富士紡績のような自家用の水力電氣による動力のほかは、日本中の動力は蒸氣エンジンか瓦斯エンジンなどであつて電力は暁の星といつてよい有様でした。私もはこの京都から煙突を絶滅しようと計画して死物狂のように努力をしました。その結果、大正四年頃は市内の動力ごとく電化してしまいました。

◆動力の電化と同時に熱の電化に心血を注ぎました。電熱を大量にはじめて應用したのは大正四年の大正御大典のときであります。京都市主催の各国皇族、大公使、親任官の宴会場となつた祇園八坂俱樂部を十一月下旬の寒空に華氏七〇度に保ちたいというのでありましたが蒸氣暖房設備もなく、炭火は使えないというので困つて私と同姓の市の才一助役石川濟次氏が私に相談があつたので洋銀線(今のような発熱合金線がなかつた)をエレメントとする電氣ストーブ一八〇キロワットをもつて暖房の目的を達して成功を収めました。

◇次いで夫婦共稼ぎの家庭の炊爨きその他一般炊事の熱を電化したらいかに労力が省けて生活を享樂することができ得るであろうと考えて、小家庭の一升釜の電化を試みて昭和二年頃には一〇、〇〇〇キロワットに達しました。また修学旅行の旅館の大量炊飯を電熱化してきわめて小スペースで清潔で簡便で労力の節約ができてよるこばれました。

◇産業面にも陶器の錦窯の電化を始め、多方面に電化が浸透してきました。わたくし共はあらゆる熱を電化せねばならないという意気込みでしたから、まさに電化特攻隊でありました。同業者が毎日のように視察に見えまして電化のメッカなどと過分のおほめをうけたことがありました。

◇私の記憶によれば大正末期頃は京都大学は自家用事業者で自家発電であり電気教室の一隅にあった火力発電によった小容量のものでしたが各部の教室建築物がつつぎ増設されるのに発電所は拡張できないから電力不足で困っていられた。大学の電気監督が本野先生の時と記憶しますが、自家発電をやめて京都電灯から受電することになって、その後自家発電を廃されました。自家発電をやめて買電することは学内においても政府当局に対しても簡単に実行ができないようなわけがあったので、私の案として京都電灯の高野発電所（一八〇キロワット、高野川上流八瀬村に堰堤も造り引水した水力発電所であるが、この発電所は明治三十六年に建設され水車は米国製マッコミック、発電機はスタンレーの三相誘導型交流式で京都市堀川中立売にある小さな赤煉瓦建物の堀川変電所に送電し、ここで三相式を二相式にして市内に配電していた、その後奥村電機製の水車発電機に取り換えて現在に至った）を大学の実験用に貸与することにしてこの電気を使用するということになりました。実験用にするという意味で水量を計量記録するベンチュリメーターの装置を備えました。ところが高野川の水量は増減が甚しかったため、この水力のみでは常用にならないから一般配電系統から送電する方が多かつたと思います。以上の大学の自家発電を京都電灯から買電する交渉は青柳先生と私がやつたと思います。

こういう昔話は余り歓迎されないと思いますが大学の電気教室の歴史の一駒として書き残しておいてもよいと思つて余日を頂戴することにしました。

◇明治四十年頃の日本全国の発電力、水力二三、四一六キロ、火力二九、四五五、計五二、八八二キロワット（電鉄専用を除く）であつたのが昭和三十二年度末に於て最大出力一〇、二八六、二〇五キロワット、汽力及び内燃最大出力

六、五五九、三八七キロワット、計一六、八四五、九二キロワット、発電電力量六八、八六四、三五五キロワット時となりました。誠に隔世の感があるわけです。

◇米国のある書物に一八五〇年にアメリカの生産に用いられた全エネルギーの七四％が人と畜力によつたのが一九五〇年には全エネルギーの七％となって残る九三％が機械が仕事をしているといわれています。日本の現状はどういう数字になるか私はまだ研究したことはありませんが恐らくは人畜の寄与するエネルギーは四〇％位ではないかと思はれます。

アメリカ人が人より高賃金、より短時間労働であることはこの数字を見てうなづかれます。電子工学の発達更に原子力発電等の進歩によって労働の機械化から頭脳の機械化まで進み、われわれの日常生活は盛々豊富に電気が生活が浸み込んでくるであります。電気が電子工業が科学の基礎の上に前途洋々たるものがあると思はれます。若い方に大なる期待をもつものであります。

最近の感想

明四四 川村公望

（東光電気工事株式会社監査役）

私は信州高原に生れ、上田中学校、才二高等学校を経て京都大学電気科に進学いたしました。中学以来大学卒業迄終始庭球選手として身体を鍛えて来た御陰もあってか青壮年時代は全く頑健そのものでした。処が昭和二十七年秋から肝硬変と云う難病に罹り足かけ五年の長い闘病生活を続けました。幸に命はとりとめました。それがそれ以来は何となく身体の調子が悪いので、あらゆる健康法をたづね求めて来たのですが最近漸く静電療器を体識してそれは全く神器であると信ずるに到りました。精神上自霊の浄化と身体上食養の大切なる事は勿論健康上欠くべからざる要諦とは存じますが、私は今日静電療器の活用により百歳保寿の希望を堅持するものであります。依つて今回自宅に静電室を開設し、世上多くの病者に万病治癒の福音を伝え、併て健康者には若返りと長寿の秘法を宣傳せんと企図した所以であります。

宇宙の万象は凡て之れ長短電波振動の組合せに過ぎないと思はれるのであります。静電療器は三億メートルの長波より極少十メートルの超短波をも自由に

発生する事が出来ます。之れに依って治病上偉効を挙げ得ると共に今や進んで農業方面に又工業方面にも新用途を開拓せんとして居ります。私は世の学者や医者が更に進んで静電器の改良と応用に精進し、静電波或は遊離電子の性能をつぶさに探密し、此秘鍵を以て天関を打破し真に光輝ある大宇宙時代の展開を待望して止まないものであります。茲に最近の感想と題し私の電気生活五十年の記念と致します。(三三、一一、一五)

恩師小倉先生と潜水艦用電量計

明四五 山下 行 雄

(電気式化学計器研究所社長)

大正六年頃私が大阪のA会社に世話になって居た頃、会社は米國S会社製の潜水艦用電量計を海軍に売り込んで居た、然るにこの計器が一年とたぬ内に水銀が腐蝕して使用に堪へず作戦上潜水艦にとり重要な物だった丈々に海軍側からの会社への追及は猛烈を極め、会社はS会社に火の様催促をするが一向にちがあかず、此の間に一ヶ年位は過ぎてしまった。この間、私は自分の担当であつたので故障救助の方法では駄目である事に気付き、腐蝕物を分析して見た処が銅と水銀の合金及びその酸化物である事がわかつた、それでアーマチュアに希金属を鍍金してやってみたら見事に成績の結果を得た。折も折、シビレを切らした海軍は工業新聞上で潜水艦用電量計の研究をやる者いまいかと全国に呼びかけた。私はこれに応じた処、反射的に研究依頼が来て同紙上に掲載された。

これを見た社長は私を呼んで「これは米國でやる」已に成算はついて居た私は「これは日本(即ち会社)でやる可きだ」と主張して譲らなかつた。終にこの談判は決裂してしまつた。血が若かつたので多分に無分別の処があつた。

その当時はA会社がS社の、三菱さんがGEのI・14型交流積算計の全部品を転入組立、調整して居られたか又はこれに近似して居られたと思う。然るにこの研究は電量計の理論は勿論、材料を聚集し而も不完全の工作機械でやり付けるので、思へば無謀とも云へやう。

それから数日してから電気倶楽部に小倉先生を御尋ねして事の仔細を報告して叱責を待った、先生は温顔で「あせらずにやれ、困った事があつたら何でも云つて来い、研究にかじり付かずによく遊ぶ事だ」と云つて下さり色々方面

に紹介して下さつた、同時に海軍の方にも紹介を頼んだ。その結果は素晴らしかつた。諸会社、知客の方が応援下さる返信を頂いた、この計器の国防上如何に重要であり外國に日本の潜水艦の容量を秘密にしなければならなかつたかがわかつた。

機械を据付職工を雇入れ、研究に取りかゝつた。基礎実験がすみ試作品が出来、特性曲線も大体海軍の所望する程度に出来た。

先生が見に来られた、「まだ、まだ」と云はれた。海軍の心配した処は「本計器が潜水艦の激震に耐え得るか」と云う事だつた。これにはやってみなければわからないので海軍の方に「万一の場合には決して迷惑をかけぬから潜水艦に電量計を取付けて試験したく乗艦させて呉れ」と申出た。

大学に文献を調べる為め、チョイチョイ行つて、帰りには円山公園などを遊歩し、なつかしき料亭の庭を望めて京料理を楽しんで帰るのが例になつた。研究の完成をあせるいらただしさが潮の引くごとく頭頂より昇散して行つた。これが先生の云はれた「遊べ」と云う事かなと一人微笑した。

暫く日を置いて倶楽部に先生を訪れた、先生から「この間、家内と娘をつれて四条大橋か処を歩いて居たが君はその時電車から飛び降りたな、自愛せにやだめだぞ」と注意された。

試作品は出来上つた、過荷重運転をしてもビクともしない、早く試験せねばと海軍に催促に行つた。「それでは、F造船所から駆逐艦「楡」が試運転に出るから乗せて貰へ」との事で職長と二人で楡の中甲板に計器を取り付けた。艦で一番激震する処である。速力の付くにつれて計器の円板の震動ははげしくなり、回転にムラが出る様になつたがどうやら持ちこたえた。今度は即時停止と云うやつで全速の艦体に逆転をかけてイチかバチかの時に止める時の試験で、中甲板の中には自分と職長とが残る様になつた。心細かつた。スクリーンに全速がかゝり艦はブルブルンと今にもどうにかかなりはしないかと思はせてバク進する。ダーンと云う急止と共に艦は激突して結び付けてあつた器物が綱を切つて飛ぶのもあつた。計器に駆けよつて見ればこわれては居ないが役に立たない。

海軍の恐れて居た震動の範囲はわかつた。不備の部分を改善して居た。今日の仕事を終えて楯がわに休んで居るとクタクタマシイ号外のベルに連れて一片の号外が窓より投げ込まれた。

の大見出しだった。機械に付いて居た職長がまっ黒い手で飛んで来た。実はこの艦に乗艦する様に海軍省に願出であつたが前述の試験計器がこれより四、五日前に出来たので私達は楡に乗り命拾ひをしたのであつた。二人は心から喜び合つた。

電量計の試作品が出来た。早速、これを持って吳の潜水学校に行った海軍の入達は国産品が出来たと云つて大変喜ばれた。計器の成績はまあまあと云う処だった。帰路旧友の野木商店の主人を訪れた、野木さんがそんなものを黙つて居る者があるかと云うて朝日新聞記者に話して呉れた。

「潜水艦用電量計に新生面を開く―山下行雄氏の發明」の見出しで紙面のはでな処に掲載された。

先生、旧友等から祝詞が与せられた。誰れかに用があつて電気倶楽部に行つた。撞球室の横にある休憩室に居たがA会社のA氏が傍から寄つて来た。面が逢つたが礼はしらかつた。くすぐつたい位にお世辞を云う、帰つて来て貰いたいと言ひ出せない様だった。私は横を向いて倶楽部を出た。

資金がソロソロ不足を告げて来た、小倉先生に御願ひして直流積算器を作つて売つて行つた。自分としても三菱さんの牧さんに頼んで電量計を買つて頂いて研究費にあてた。

商工省に補助金を催促に行く前に先生にお逢ひした。先生から官庁に行くならば「髪は少しバラバラ、アゴヒゲは少しある方がよいぞ」と教示され商工省に行つて最近の報告をして、滞りなく補助金を頂いて帰つた。

本研究は其の後、先生、海軍省の斡旋で横河電機さんに買収して頂き、私は職長、職員と共に会社に入社して本計器を完成され、完全に米国品を駆逐した。今日よりこの時を回顧すれば約四〇年前である。私の様なものが大過なく今日まで過して来たのは唯々先生の厚恩の教示所としみじみ思う。時々失敗する事がある、その時は大低先生の教示を忘れて居た時である。

附記 この計器はその後たゆみなく研究されて今は完璧したものとなつて居る。

わが恩師の思い出

明四五 道 田 貞 治

(大阪電気通信短期大学長)

私が電気工学科在学中の電気教室の先生は、難波正先生、青柳栄司先生、小倉公平先生、本野亨先生、清水義一先生、及び野田清一郎先生であつた。何れも我国電気工学の権威者であつたことはいふ迄もない。今では野田先生の外は何れも物故せられたことは、誠に残念な極みである。

当時は学生の数も少なく、私達同期生は僅か二十数人であつたと記憶する。従つて学生相互間は勿論、先生と学生との間も極めて親密であり、先生達は学生の性質や長所短所をよく知つて指導して下さつたし、学生達も亦先生によく親しむと同時に、先生の長所や癖などを見抜いてお互の語草や笑ひの種としたもので、こんなことから先生に対する思い出が殊の外深いものがあるのである。

難波先生は威風堂々然も柔和なお顔で、学生が親しみやすい人柄であつた。先生には交流理論と交流機械の講義を聞いたが、講義がお上手なので聞いていてはる間はよくわかつたように思つて居ても、後でノートを讀むとわからなところが多い。それで或時一學生が「先生の講義は教室ではわかつたように思つていても、後でノートを讀むとさっぱりわかりません」というと、「さうだろうそれが講義のうまいところだ」と云つて得意(?)で居られた。又当時の電気学科の教室の建物は四角な煉瓦建で、中庭があつてそこに一面に芝生が植えられ、中央につつじやばたんなどを植えた花壇があつた。花の時季ともなればその花壇の周囲に學生が集まつて雑談にふけつたものだが、時々先生が出て来られて我々と一緒に話をせられた。そのような時に先生の口からよく出たのは、先生が勲一等の勲章をもつて居られることの自慢で、「君等は大学生を出てからのどの方面に就職するにしても、僕のように勲一等の位を貰うような地位にならなければ駄目だ」と云つて、私達を励まして下さつた。

青柳先生からは送配電及電灯照明の講義を聞いたが、先生は講義中よく「独乙では」と云われた。独乙礼讃者で先生が独乙留学中余程独乙がお氣に入つたものと見える。先生は我々によく常識の涵養を強調せられ、又晩年には信仰の必要を説かれ今でいう道徳教育を説かれた。そして信仰に関する大部な著書も

あった。私も一冊頂いて愛読したが、戦災のために焼失したのはまことに残念である。先生のかかる御訓とうが、私にとって生涯の一つの大きな指針となつて居るように思つて居る。

小倉先生は私達が入学した時は、欧米留学から帰朝せられて間もない頃で一番油の乗った頃であつたと思う。それで学生の最も苦手とする電気磁気学の講義を受持つて居られたが、学生にとっては六ヶ敷くて一回の試験でパスするのはクラス中二、三人位のもので、残りのものは二年又は三年になつてやつとパスするといった具合で、中々苦勞したものである。二、三年前私は我家の古本などを入れて置く納戸を整理していたところ、偶然にも小倉先生から受けた講義のノートの一冊が出て来た。私はそれを読んで当時の小倉先生の面影を思い出し、転た懐旧の念にたえなかつたことがある。

本野先生や清水先生についても色々思い出話があつて一応書いて見たが、へられた紙面も己に著しく超過しているので残念ながら省略することとし、只受けた厚き御教訓に対し感謝の辞を述べさせて頂くだけにする。

以上私は電気工学科に三ヶ年間に在学中、諸先生から受けた御懇切なる教訓に対し、終世忘れることなき感謝の意を表する一端として書きつらねたのであるが、充分その意をつくさず却つて失礼にあたる点もあるかも知れないが、どうか諸先生の在天の御霊よ、私の意のあるところを諒とせられ、御許しあらんことを祈りつつ筆を擱く次である。

思　い　出

大三　高　柳　与　四　郎

(徳山機械株式会社相談役)

学生時代で一番印象に残っているのは牡丹会である。先輩の卒業記念に寄贈された多数の牡丹の株が電気教室の内庭に植えられ、その花盛に先生方、学生、卒業生が多勢集つて園遊会が開かれたのである。教授としては難波、青柳、小倉、本野の諸先生、助教では清水、野田の両先生、鳥養先生は講師だつたと思う。月桂冠のこもかぶりを据え、鏡を抜いて自由に飲んだ訳であるがその味は多年に渡つて忘れ難いものであつた。赤い顔をニコニコさせておられた難波先生のお顔は今でもよく覚えて居る。

青柳先生は就職のお世話をよくされて九州方面にも時々おみえになつたが、或る時おいでの機会に北九州在住の卒業生と会食されたことがあつた。場所は門司の布刈神社の側の料亭で、関門海峡の絶景を眺めながら食事をした訳であつたが、当時先生は禁酒会員で水ばかり盛んに飲まれておられたので我々も酒を飲む訳にもまいらず少なからず閉口した次であつた。

小倉の九軌には京大出身の先輩には広瀬、福井の両氏、二年後輩の春井君がおられたが大東亜戦争の終戦前に春井君が一番に逝き、終戦後広瀬、福井の両先輩共既になく今では私独り生き残つて了つた。健康状態は至つてよろしいので他の三人分迄長生きをしようと思つています。(三三、一一、一四)

六十周年記念号に寄せて

大四　小　笹　進

私は子供がないせいかわつまでも若い気持ちで毎日を送っていますが、もう古稀に垂んとしている。さて昔を回顧すると学生時代で最も印象的であつたのは大学一年生のときに電気科の中庭で催された牡丹会であつた。私は新設されたばかりの八高で学んだせいか同校は極めて厳格主義であつたので、当時は普通民間の家で下宿するにも一々学校のお許しが必要で酒は勿論のこと厳禁であつたが、大学へ来て見るとあらゆる方面で一時に開放された気持ちになつた。殊に牡丹会では年中で一番気持のよい五月の夕刻から夜にかけて中庭の中央高く建っている避雷針の下で美しく咲き乱れている牡丹の中に割込んで、先生も助手も先輩も皆一諸に思ふ存分談笑したのは何より愉しい思出となつた。然し今日ではそれ等恩師の大部分や、実験室で御厄介になつた助手の方や、先輩並に同輩の相当多数を失つて居ることを思い浮べるとしみじみ人生の果敢なきを感じ、自分も老境に深く踏み込んで居ることを心淋しく自覚するのである。

次に仕事の面では旧東京電灯株式会社傍系の京浜電力株式会社が職中大正十二年二月に当時の吾国最高電圧十五万四千ボルト送電に成功したことである。変電設備に屋外式を採用したのも吾国ではこれが嚆矢であつた。十一万送電では大正三年に猪苗代水力電気が、二十八万ボルト送電では昭和二十八年に関西電力が最高電圧送電の新記録を樹立したのであるから、吾国電気供給は大正三

年より九年間は最高十一万ボルトで行われていたが次の三十年もの永い間は最高十五万ボルトで間に合っていたのである。前述の通り大正十二年には最高電圧送電のレコードを作ったと云うものの実の処吾々技術者は、当時吾国では製作できなかった電気機器を米国で作って貰ってそれを据付けて運転しただけのことであったが、鉄塔に関する限りは自分が根本的に設計した処女作であったがそれが関東大震災にも見事に堪え大に自信を得た。而してその昔の鉄塔が三十数年後の今日建設せられつつある鉄塔と較べて優るとも避色のない点より考えると、鉄塔技術はもう此の上新考案も出来ず疾くに飽和状態に到達しているのではないかと思われる。同年六月には私は才二期工事に使用の電気機械類の製作打合せに電気事業視察の社命を受けて渡米し、且つ家内は同時に帰郷したので兩人共関東大震災の難を免れたのは幸であった。私はその災害の当時G E 会社の本工場のある小都市スケネクタデーに於て下宿生活をしていたが、下宿の主人は九月二日の朝日本の大震災の報道している新聞記事を私に親切に示してくれた。而して街に出ると所要所には日本の震災義捐金募集の箱を持ったアメリカ人が立っているのを見て国境を越えた米人の温情振には深く感謝感激した次才であった。

思 い 出

大四 松 尾 正 男

(田辺化工機械株式会社相談役)

大正元年入学して午前中講義、午後実習となつたが、一組が四人宛で自分は岡本尠氏、小山熊次郎氏、柚木清三郎氏と一緒に非常に懇意にして貰い幸福であった。卒業後も色々御援助御指導を賜はつた事を感銘して居る。二年五月教室の明地で美しい盛りの牡丹花見会が催され仲々和かで学生の皆様と益々昵懇となつた。四年七月住友に入社大阪と新居浜に勤務したが、日本で始めての海底電力ケーブルを布設する事となつた。新居浜と瀬戸内海の四阪島間で電圧一万一千V・千三百K.W.三相である。新居浜の別子機械課を製作所として工場と人員を増強して現在の住友機械会社の基礎を作った。健康の爲め静養後、電気化学の仕事をする事となり、石灰窒素肥料用窒素を空気より分離する機械を外貨が得られないので日本で製作する事となり、商工省より補助金を得て研

究、見事九九、九〇以上の好能率機が完成した。目下台湾、新潟、福岡、岩手各県で十台程働いて居る。又硫酸肥料用として水分離機の能率よく、場所少く設備費の経済的な機械を外国に行き研究したが都合あり中止して居る。同時に低燐銑と同時に燃料瓦斯を発生する日本で始めての密閉式電気炉を、独、伊、仏、英、米、ノールウエで研究し、岩手県に七千五百K.V.A.二台の電炉を昭和十四年より操業して居る。此炉はオスローのデットノルスチ設計を参考としたが、低燐銑も良好なものが出来ると共に瓦斯の成分も有効な成分が得られた。引き続き電気炉の研究をして少しでも国家の爲に尽したいと念願して居る。(三三、一一、一〇)

想 い 出 に 寄 せて

大五 稻 田 虎 彦

私は大正二年入学同五年卒業の老生である。その在学中の想い出は数多くあるが、茲には在学中よりも寧ろ世の中に出て実務につく様になつてから特に感慨をいよく、深めた事の一つについて話し度い。

難波正先生の交流理論は己に定評のある名講義であった。私は教授生活の体験がないから所見の適否は読む人々の勝手ではあるが、講義の草稿が美事に整つて居るといふ事は才一義的なことに相違ないけれども、己に世上に刊行されて居る斯界権威の著書を拝借して、先哲の受け売りを誤りなく傳える様にすれば訳のないことの様に思はれるのである。ところが難波先生の直話によると、先生が電気工学を学ばれた頃は電信とか電池といった静電気工学の段階に止まつて居り、従つて学修する量も少く、モールスコードの暗記も重要な項目の一つであり、実習には電柱の建設なども指揮されたと広聞して居る。それ故電力や交流工学はその後発展し来つた新分野であつた訳である。だから交流理論の体系を整へるためには各国先進の刻々に発表する事蹟につき一々調査検討して煩を厭はず、之等を整理統合して一つの体系に序列する鑑識力を必要とするのみならず、日進月歩の発達趨勢を常に取り入れて要す修正を草稿に加える事が肝要である筈である。

こうした謂はば百花療乱の事蹟に当面して之に序列を正し体系を附与する仕

事は、コロンプスの卵であつてその纏め方がよく出来て居れば居る程、何の奇も無き当然のこのことのように見られ勝ではあるが、その才一着手をやる事は並大抵の事ではない。

私が大学の御世話で海軍に入り、主として高周波工学の応用に数十年携はつた経験から言つてもその難事業たるものが骨身に沁みて痛感されたところである。交流理論の最後の方に僅か一二項目電気振動とか共振現象のことが述べてあるのを基礎智識として、工学の中でも最も足の速い高周波関係の新智識を吸収消化し自ら体系附け乍らその最新卓抜の軍事的応用に専念して予期の効果を諸外国に先立って挙げて行く事のむつかしさに日夜当面するに及んで、往年の難波先生の名講交流理論に想いを走らせつゝその珠玉的結晶たる所以を悟ることが出来た。

この事は航空と同様諸工学中最も駿足の電子工学には免れ得ない宿命であると思う。先年新に電子工学科の独立を見たときと広聞するがその講述を担当せられる諸教授方の草稿は無論かくの如き労作の結晶であり、更に刻々の最近事項の加除訂正の織り込まれたものであろうことは間違いの無いところと信ずるが故に、特に受講の学生諸賢に望みたいことはその所産のかくれたる諸教授の渾身の努力に想いを走せ、勉勵修得に格段の感謝の念を以て臨む心構えを以てせられんことである。

所 感

大五 七 里 藤 雄

(大阪大学名与教授
関北電力株式会社顧問)

我が教室の初期の卒業生の大多数は既に物故せられ、或は功成り名遂げて引退して居られるが、之等先輩諸士の足跡を顧みると他の大学の出身者に較べて非常に進歩的であつて、我国の技術の進歩に常に大きな功績をして来られたことに気付くのである。之れは私のいつも諸先輩に大きな敬意を払つてゐる謂所であるが、斯かる優れた多数の卒業生を輩出したことは創立当時からの先生方の偉大な精神力によつて導かれた我教室の尊い伝統の力によるものであると思ふ。

満六十年と謂ふと人間の一生では還暦に当るのであるから、創立当時の開拓

者的精神と謂ふやうなものが消えて行くのが当然かも知れないが、技術の真価は創造にあり進歩的精神無くては眞の技術者ではあり得ないのであるから、今日世の中で現に活躍して居られる又は今後世の中に出て行かれる卒業生諸君は此の尊い伝統を守りつゞけ、否益々其の精神を發揮して我国の技術の向上に努力せられんことを祈る次才である。

信 友 会 由 来

大六 山 村 忠 行

(応用科学研究所常務理事)

信友会とは難波先生が大正六、七年卒業の同窓会に名付けられた名称である。丁度本年がその四十周年に当るので去る五月に四日間亘り家族同伴にて熱海、箱根および東京にて盛大な会合を催したことは本会報八月号に記載の通りである。

卒業以来、毎年二三回少くとも一回は会合を開いたから已に六十回以上となつてゐる。かくも親しく人生の半以上を過ごし得たことは誠に幸福である。

大正三年に入學したのであるが、その年は三〇名余りの入學生の中二〇名が三高出身者であつた。従つて入學しても高等学校の延長の様な気がした。三高では森総先生の物理、奥山先生の微積分、また虫眼鏡で製図の線の引き方を調べられた福田先生とかに相当苦しめられて来たのに、大学へ来ては難波先生の交流理論と小倉先生の電磁気学位で他は楽で毎日テニスをなし、休日には打ち連れて小旅行をした。

従つてテニスでは電気教室にて画期的な時代を作つた。大正六年組には魚住、光野組、山村、佐藤組といつた剛のテニスマンが居て、当時の大学選手であつた元衆議院議長林讓治君よりもずっと旨いとうぬばれていた。それで對抗マツチを三高、一中の先生方は勿論、市内の中等学校、小学校の先生方の選抜軍としても殆んど敗けなかつた。

たつた一度負けたのは府立才二高女で先生方の選抜軍と試合をした時に、その試合の前に準備のため板塀にそつて放列をしいていた所を同校寄宿舎の二階の窓から寄宿生が多数笑つて見ているの気がついた時には已に後の祭で一同は恐縮した。それによつてもないが兎に角当らなかつたので敗けたことがあ

る。

一般に大正六年組は男性的でテニスに熱中することが出来たのも大正七年組の内助の功である。当時製図室は同じ広い教室であつたから六年組がペンシルウォークしてあるのを、七年組がよくインキングを手伝ってくれたのを覚えてゐる。

また、テラスコートは今の工学部の建物の処、または土木教室の処であつて、いつも試合の時には七年組が教室から椅子を選んだり（一度椅子を運び出すのを小倉先生に見つかつて目玉を頂いたことがある）湯茶の接待を受もつて呉れた。

か様にして兎に角教室の時からお互に親密にしてゐた。

卒業後は信友会の名称の下に時にふれ折にふれて会合を催した。その場所は宇治川畔の料亭花屋敷ときめていた。これには好都合のことがあつた。上林君が宇治の人であり、その奥様がまことに好く出来た人で、いつも会費は一人当りいくらになるだろうと胸算用して各自に出させる。出さない人もあつたかも知れないが辻忠君と筆者とがそのきめた額に人数を乗じた合計額を奥様にことづけておくのである。

すると次の会合の時に前回の過不足を聞き勘定をすませる。まことによく出来てゐた。上林君は店で買物をしてその釣銭だけ大事にしまつて買った品物はそのまま置いて帰る様な人でとてもこんな面倒を見てくれそうもない。

その他にも風変りの人も多くある。或る会合の時、宇治川左岸の桜を見ながら散歩していたが筆者が歯痛を覚えた時に、池田秀之君がポケットからワイスキーを出しこれを含んで居れば直ると云つてくれた。

池田君は三高六年、大学六年とぎりぎり一っぱい在学习した人であるが、頭はよい人でたゞ勉強せないだけで卒業の時は七、八課目を連日受験して卒業した。池田君の時事問題の解説は有名であつた。製図室のストープにあたりながら喜んで拝聴したものである。

ストープで思ひだが、ストープの側え来ると馬糞の臭がぶんぶんするので困らせた工藤君は、皆が卒業してしまえば馬が可愛想だと卒業を一年延期した。

前夜飲み過ぎたからといって、いとも易い電鉄の試験を受けずに卒業を延ばした魚住君は鉄道省の電気局長になつた。等々思ひ出はつきない。これらの会

員が集まるのであるから会合の盛大なことは申すまでもない。

六十周年記念パーティーに信友会員は一名出席していたが、筆者をとらまえて口々に早く開かんかとか、次回は久方振りに宇治の花屋敷にして呉れとか、すぐにも招集状を出せとか詰め寄せられたが、とても本年中は忙はしいから来春にして呉れと頼んだ次才である。招集状は誰が出すとか会計は誰がするとかはいつも皆がそうきめているようである。

洛友会もこの信友会がニュークレアスとなつた感がある。東京在住の信友会員の乙葉君等が同窓会の創立を云い出したのを同会員の加藤、阿部両君がもち帰つて、昭和二十七年九月に大阪の電気倶楽部に関西の卒業生有志を集めて下相談をした。その時、筆者は東京出張することになつて居たので欠席した。

その席で異論も出たようであるが大勢は同窓会を復興組織立てよう、そしてその会長には鳥養先生を、幹事には筆者をしようと決めてしまつた。それから筆者はあはてて会則を作るやら総会通知を出すやらして、同年十一月二十八日に総会を開くこととし茲に洛友会が目出度く発足したのである。

か様にして時代の要求はあつたとしても信友会が洛友会にまで發展したと考へても無理はないようである。

私の思い出

大七 加藤 信 義

(京都大学名誉教授
大阪工業大学校長)

京都大学工学部の電気工学教室は、本年を以て創立六十周年を迎える事になつた。明治卅一年に創設されてこの方、六十年の間に、二千四百余名の卒業生を出し、幾多の研究業績を残してわが国の産業界の進歩発達に貢献する所が甚大であつた事は、我々の最も欣幸とする所である。

私は昨年十月、京都大学を定年退職し、直ちに、大阪工業大学に就職する事になつたが、京都大学在職中における思出は色々あるが、その内の一つに電子工学科の新設の事が数えられる。

わが国において電子工学科が、大学に設置されたのは、京都大学が最初ではない。その先鞭をつけたのは、静岡大学である。然し京都大学は、決してそれをそのまま真似た訳ではない。

私が昭和廿五年に、ガリオア資金によって、米國工業大学の教育制度を視察に、アメリカに渡って、大小の大学十四校について、つぶさにその教育方針や、教授陣容や、施設や、設備や、教科課程や研究状態等を研究視察した。

アメリカの大学では、電気工学科は、電力工学と、通信工学と、電子工学との三つの分科に分れていて、電子工学は各種産業の新しい基礎工学として、非常に重要な学科となり、産業界からその卒業生が要望されている。若しわが国の産業が、アメリカの産業の様に繁栄するならば、わが国においても数年を出でずして電子工学科の卒業生が、産業界においてアメリカと同様に歓迎されるのではないかと考えて、帰朝後直ちに電子工学科の新設を、文部省に申請した。それには電気教室の長老の鳥養先生を始め、同僚の松田、阿部の両教授や、電気教室のそれ以外の教授諸氏の賛同を得更に工学部の教授会の承認を得た事は申す迄もない。幸に文部省も電子工学科の新設の時宜に適した計画である事が認められて昭和廿九年五月にそれが新設される事になった。

何といつても、最近における産業界の花形は、原子力の開発と、産業のオートメーション化であつて、その基礎となる工学は電子工学である。その基礎理論と、その応用とを身につけた新進の技術者は、各方面から歓迎されているので、本年四月から東京大学、東北大学、大阪大学、名古屋大学に、電子工学科が新設され、それに引き繼いで各地の国立私立の大学に、電子工学科の新設を見んとしている状態である。

電子工学の最近の動向は、その進歩發達が実に目覚ましい様相を呈して来たという事である。それは一つの物理や、化学の現象が発見されてから、それらが実用に供される迄の日子が次々に短くなって来たという事である。電気工学において使用されている發電機や、モーターの原理をなしているものは、フレデーの電磁誘導の法則であるが、その発見は、一八三一年（天保二年）であり、それが發電機となり、モーターとなつて実用される様になつたのは、一八七九年（明治十二年）頃で、約五十年が経過している。

真空管では、一八八三年（明治十六年）に、エヂソンがエヂソン効果を発見し、それが真空管として、実用に供されたのが、一九一五年（大正四年）頃であつて、約三十年の日子が経過している。

原子炉については、中性子が発見されてから、原子炉が初めて作られる迄に僅か九年しかかかつていない。トランヂスターも、その原理が発見されてから二

年程たつて、それが実用化されている。以上述べた様に、現象が発見されてから、実用化される迄の期間が、段々と短くなりつつある事は、電子工学の特徴として特筆す可き事と思われる。

私は私が、京都大学に在職していた長い過去を顧みて、実に感慨無量である。私は私が過去において、研究を一つの趣味として楽しんで来た様な悠長なやり方では、今後はほんとに役に立たない様に思う。今後の若い諸君は、わが国の産業の将来を背つて立つ人々であるから、必ずしも先輩のまねをせず、大いに研究に、スピードを上げて、新機軸を出してわが国の産業のレベルを世界の水準以上上げて戴きたいと思う。

完備した教室

大七 阿 部 清

（京都大学名誉教授
同志社大学工学部教授）

私は電気工学科へ入学したのは大正四年であるから今から四十三年も前のことである。その当時は四講座で建物も正方形の平屋の煉瓦造りだけであつた。現在は電気・電子両教室合せて十講座、化学研究所の電気材料研究室の教授定員を入れると計十一で大正年代の約三倍になり、建物ならびに設備も講座数に應じ拡充されている。誠にすばらしい發展である。しかし現在科学技術の最尖端として時代の脚光を浴びている原子力発電にしても、半導体機器にしても電気・電子両工学の新しい応用部門に外ならないことを考えると、さらに講座が増設され上記の新しい分野の教育と研究に必要な設備が充実されることが望ましい。

それにつけても思い出されることは、今から一年余り前に京大医学部のある教授から聞いた話である。その教授が学生時代いまは故人となられた医学部の清野謙次先生から「医は仁術なり」という古い言葉の意味を次のように教えられたというのである。すなわち医学の進歩に努力することは自からの活動分野を狭くする結果になる換言すると、自らを犠牲にして人類のため医学の進歩に尽すのが医師の職務であるから仁術であると説明されたそうである。さらにその教授は清野先生の言葉を証明する意味で次の話をつけ加えた。いまから十数年前には結核と梅毒の治療に秀でた人が医師として一番活躍したが現在はこの

種の病氣は激減したので結核や梅毒専門の医師は困っているというのである。

しかしたとえば放射線障害（原子病）の治療が可能となり、何の不安もなく原子力を利用し得る時代を想像するだけでも医学方面には魅力に富んだ研究課題が多いように思う。とわいうものの医学の窮極の目標が人類を病氣から開放するにあるとすると、将来医師の働く分野がほとんどない状態がくるかも知れぬ。

これに対し電気関係は学問の進歩するほどその分野が広くなり狭くなることは考えられぬ。この方面を専門とするわれわれは誠に幸せである。しかし私どもも唯手ばなしで喜んでいてはならない。常に学問の進歩に遅れないよう不断的の勉学が必要である、とわいうものの実務に服していると新智識を吸収する勉強の暇が得難い。最も効果的な新智識獲得法は母校の教室を訪問して先生方の研究室を見学させて戴いて手易に御説明を願うことである。しかしこの方法は現状では先生方に大変な迷惑をかけることになる、まず先生の負担を軽くし先生本来の職務である教育と研究に支障をきたさないだけの研究陣容の充実と設備の拡充が必要である。私は一日も早くそのような完備した電気・電子両教室の出現を心から祈る次第である。

余生を楽しめ

大七 各務米次郎

人間はいつ死ぬか、昔は六十、七十で棺桶の臭いがした。今は八十、九十と飛んでしまった。難波、青柳、小倉、本野、清水、大竹の諸先生は前者の例で姿を消された。鳥養先生あたりから後者の感がする。我々の仲間ももう三分の一の八名は死んだ。我々は初老だが会って話をしてると学生時代の臭いがしてくる。誰が先に死にそうにも思えない。然しもう二十年も過ぎて八十いくつにもなると、三分の一が姿を消し三分の一が残るだろう。この三分の一も恐らく九十五迄の十年ですっかり姿を消すだろう。我々は今もう日の暮れ前の午後三時頃だから余生を楽しむ権利が出来ておる。自賛ではないが長生きするだけでも何くれと世のためになる。老人にはうるおいが必要だ、花を愛し茶を楽しむ、何でもよいが余り気のつまったり不衛生な趣味は止めたがよい。お互に大

に余生を楽しもうじゃないか。

何をくよく／＼川端柳水の流れを見てくらせとネ（三三、一一、一五）

大正中期の学校生活

大九 菅 琴 二一
（姫川電力株式会社社長）

吾々の入学した大正六年と言うと、才一次世界大戦の好影響によって世を挙げて好景氣を謳歌した時代で、大学志願者ですら化学、探鉱と言う方面に集り、お蔭で電気教室には無試験入学を許されたものである。入学自体そのように凡々であり、三高からの友人が多かったので、新しい境遇に対する緊張感はほとんど感ぜられず、学校へ出るにも今までのように予習を強いられることは無く、インク壺とペンさえ忘れなければ氣楽に出席出来ると言う、一種の解放感を持ったと思われる。

一年の間は他の教室へ受講に行くことが多く、数学の河合教授、力学の新城教授、水力学、熱力学など何となく面白かった。電気教室の中でもエレキマグネの演習など面白いと思つたが、極めて短期間に終つたようで、今でも残りおしく思っている。暗記の努力を要する解説的の課目は、なる可く簡単にして貰つて、基礎になる理論的のものをみっちりやつて貰うと、大学の感じがより多く出るように思えてならぬ。

小倉さんと言う一部の学生には大変恐れられている教授が居られた。電気教室で小豆島え秋の旅行に出る日のことである。先生の講義がすんでから出掛けの予定になっていたが、この講義を休んで貰うと時間の余裕が出来て都合が良い。誰か先生に頼んで見ようと言う事になった。猫の首に鈴をつける気持でおそるおそるお願をしたところ、案外にも上機嫌で、例の童顔をほころばせて皮肉一つ無くOKが出た。大学生活三年間にれしかつた出来事の一つと言えよう。同じく一年の時と思うが教授学生で平八茶屋へ行つたことがある。僕もテーブルスピッチをやらされて得意になつたように思うが、難波、青柳、本野、鳥養先生が居られた事を覚えてる。難波先生がこのような席に出られた最後では無かるうか。在学中道徳的のお話もたくさん伺つたが、もう殆んど忘れてしまった。最後の卒業試験に、和服に袴をつけた服装で出席したところ、あと

電氣教室の思い出

大二 今 田 英 作

(京阪電氣鉄道株式会社副社長)

的な動機と信念にもとづくことを強調されて、私も聴講して最も深い感銘をうけた一人でありました。先生の精神教育はその後教室においても機会あるごとに繰返され、いささか耳にタコが出来た感じでありましたが、その後専門学校で教える立場になり、教え子を世に送りつつ、工業教育の真のあり方をふかく反省しまして、技術の本質と技術者の特質とをつきつめて考えてみますと「技術の本質は科学にもとずいて人間の本性である創造性を發揮することであり、技術者の特質はこの人間の本性を發揮して新しいものをつくり出しこれを広く人類の幸福と文化の發達のために普及することである」と悟りました。また技術者がこのような崇高な責務をはたすためには、あらゆる徳性特に眞実・進取性・責任観・信念・廉潔・勤勉・正確・寛容など精神的な要素がきわめて大きな力であり、動機であることを知りました。青柳精神はあまりに精神面をつよく強調せられました、先生御自身はそれに値する御榮達はなかつたように思いますが、教育の上に残されましたこの一大知識と、人間の創造性を高唱してつくられた青柳研究所今の応用科学研究所とは、電氣工学教室六十年の歴史のなかに燦として光を放つものであると確信いたします。

次にわが電氣工学教室から鳥養利三郎先生が工学部長となられ、さらに京大総長の重責につかれましたことは電氣工学教室の名譽であり、六十年の歴史に特筆すべきことであると思ひます。先生の高い御見識、積極的な御企画と進取不退の実行力とがこの榮光を結果したものと確信いたします。先生が青柳研究所を応用科学研究所に展開せられ、ここで高周波焼入れの發明を完成されましたことと共に、われわれの歴史のなかに聳える記念塔であると考へます。さらに喜びに堪えないことは、先生が非常に御健康で、御退官後も京都に御永住になり、先生のつくられた洛友会の象徴としていつまでも景仰する同窓生にはほえみかけられることであります。

青柳先生の高唱せられた独創と、鳥養先生の終始せられた進取の精神とは教室の精神として永く伝統せられるべきであると愚考いたします。その流れを汲む私の大学でも「独創と進取」を大学のモットーとしております。

教室がその還曆を画して、永い歴史と伝統の豊土から、若さにみなぎる潑瀾たる芽をすくすくと伸ばされて、電氣工学界の将来に偉大な貢獻をされることを期待いたしますと共に、鳥養先生の寿いよいよ高く、同窓の發展も限りなく伸びることを祈るものであります。

電氣教室の学生定員が三十名から五十名に増加したのが大正七年で、その初一回が私共であった。顔を合せて見ると高校時代の運動の猛者が相当這入って居る。そこで電氣教室の運動会をやることになり当時京都に初めて出来た四〇〇米の正式のトラックを持つ賀茂の植物園運動場を日曜日一日借りて先生・助手・学生・先生の御家族を含めた一大運動会を開催した。電氣教室の運動会らしく競技の中に、電池とベルと電線とスイッチとを置いて、早く走って行ってその結線をして早く鳴らしたものが勝ちと云うのがあった。本野先生が坊ちゃんをお連れになって御一緒に弁当を喰べて居られたのを印象的に今でも覚えてゐる。

二年ほど電氣教室の運動会が続いたが、大学にはまだ運動会がなかつた、そこで京大全校の陸上運動会をやるうと云う議が我々電氣の学生初め全学部の有志の間に起つてついに其の目的を達して大正九年に大々的に植物園運動場で、才一回の陸上運動会が開催された。当時法経工農等各学部には二名宛の学生代表員(選挙で出るので代議士の如きもの)があつて、全学の代議員会に於て此の運動会が大学へ提案されたのだが、晴れの代議員会で提案者に立つたのが当時電氣の学生で工学部の代議員であつた拙者であつたのである。運動会の熱心な主唱者であり且つ、電氣教室ではすでに二ヶ年の経験をもつていたので拙者がえらばれたのであろう。提案の趣旨説明の中に過去二年電氣教室で、運動会を開催した事実を入れて滔々と(これは疑問)述べた所、総理大臣格の荒木総長から「それは学生にとって絶対に必要なことか」の御質問があつた。そこですかさず「絶対に必要であります」と述べた。「よろしい」と云う事に相成つたのだがそれはその筈で其の前日迄に当時京大の名事務官と云はれた福井事務官と万事打合せ済みであつたので「今田君、君が提案理由を説明したら総長がそれは絶対に必要であるかと質問されるから絶対に必要であると答えたまえ」とチャンと筋書を示されて居つたのである。此の運動会が後年大きな發展をして京大から田島君(三段跳オリムピック優勝者)原田君(同二位)其の他のオリムピック大選手が出る素地となつた次才である。

余談であるが運動会の随一の花は最後の学部対抗の一六〇〇米リレーであるが、工学部は僅差で医学部に優勝を譲ったのは残念であった。拙者は一〇〇・四〇〇・トリレーに出場一〇〇・四〇〇・は一着であったがリレーには惜しくも医学部に敗れた。

三年の時であったか、東西両大学の工学部同志の連合演説会を、京大の学生集会所で開催した。東大側は有名な鳩山秀夫博士が部長で、京大側は化学の喜多先生で、自分が司会者で東大三名京大三名の弁士の雄弁会を開いたのだったが、京大の三人の弁士のうち一人は今原子力へ行っている一本松珠璣君、一人は同組の松野保登君であった。今一人は土木の比企君だったか誰だったか一寸ど忘れした。一本松君などその当時から仲々雄弁だったし、松野君の論旨も仲々よかったように思っている。東大側では機械の学生が雄弁を振った様に覚えて居る。

青柳先生の思い出だが私の会社の本社が、大阪の天満橋にあったため、昭和の初め頃、青柳先生が大阪へ来られる度に社の私の方の所へ立寄って下さった。昼頃なのですぐ我社に居る卒業生の連中に連絡して、社の隣りにあった京阪食堂で御一緒に食事をした。当時昼のランチが五十銭で相当のものを喰はせて居った。例によって先生をとり困んで、先生から社会学の講義を聞くのだが、愉快な思い出である。先生も愉快であったに違い無いと思う。

其後卒業十五年の記念の時（昭和十三年）は、同級の羽村君、藤田君と小生の三人で行事のお世話をしたが、同級生全員の家族全部の写真アルバムを作ったのは今日でもよい記念であったと思う。アルバムのお蔭で今でも家族同志が合った事もないのでよく知っている。其の時の記念晩餐会を都ホテルで開いた時、久し振りに会った同級生に「今夜はうんと飲め。酒税は国家の重要な財源だ。うんと飲んで国家に御奉公しよう」と当時の賀屋大蔵大臣の云いそうなことを小声で云ったところ、先生の席は自分から大分離れて居たのに、運悪く此の事が先生に聞えて「今田君、わしがあれほど教えて居るのに、まだわからんのか」と叱られたのは一生の大失敗であった。誠に不肖の弟子と言はざるを得ない。

戦後日本のロータリークラブは大きく発展した。其の発展に教室の鳥養先生と石川大先輩とが大きく寄与して居られる事は愉快である。御二人ともパッスドガバーナー（元地区代表者）でロータリーでは最高の名誉の地位である。ロ

ーターで御活躍になって居られる方としては大阪の七里先生がある。

七里先生はロータリーの他に大阪のフラーソンサイエターの会長であり、又、菊花芸術協会の会長でもあり、仲々その方面では大きな存在である。拙者などはロータリーの方面で特に鳥養先生・石川大先輩に大変お世話になっている。又、七里先生にはひらかたの菊人形やバラ園でこれ又大変お世話になっている。

教室の今ひとつの名物としては日本アマチュア碁の最高峰一本松珠璣君である。碁石を持った人なら誰でも同君の事を知って居られる事と思う。

一週間はど前に茨木のゴルフ場で、高等学校の友人で今東大の教授をしているS君に会ったら、「今田君この頃は大学へはいるのが仲々六ヶしいぞ、どの学科も平均してよくないと、はいれない」との事。思へば我々は最良の時代に学生生活をさせて貰ったものだ、心から感謝している。

洛北の一日

大三 本 多 静 雄

（日本電話施設株式会社社長）

想出は沢庵漬の様に古くなる程おいしくなるらしい。すっかり忘れて居た記憶が、その場へ行くと次々に浮んで来て、一層懐しさを増して来る。私は京都大学での三年余の生活の内下加茂神社は散歩区域で何回となく歩いたが、上加茂神社へは一度しか出掛けて居ない。鞍馬や貴船へはついに行かず仕舞だった。

それがこの間の電気教室六十周年記念式に出席の為に京都へ行ったときは、どうした吹廻しか上加茂へ三度も行った。記念式の当日は岐美忠雄先生と上加茂ゴルフ場へ行って夕方暗くなるまで、球を追って、京都ホテルの祝賀会へも遅参する仕舞で、旧知の諸君から叱られた。

翌日はまた朝早くから性こりもなく幸前治一君と上加茂ゴルフ場へ行った。秋晴れの一年にそう幾度もないだろうと思はれる好天気ゴルフは午過ぎに終り、帰途は上加茂神社の前で車を降りて名物「養餅」を買った。

餅を包んで呉れる五十余りの老主婦に、

「もう三十五年位前の話だが、餅屋がこの橋の東詰に数軒あり、美しい娘さ

んが居た記憶があるよ」と話しかけたら

「その家はこの先の角の家でしょう、もう廃業しました。只今は私のところだけになりました」とのことだった。

さう云はれると、また新しく想出が湧いて若い学生時代の自分の散歩姿が、そこうから、現れそうな気がした。

幸前君を京都駅に送ってから、また思直して一乗寺の詩仙堂を参観して、さらに車を飛ばして鞍馬と貴船に参詣した。

何れも初めての参詣で期待して居たよりは規模は小さいが、秋色深い洛北の山の中の社寺は平安の昔の樂趣をそのまま湛へて居る気がした。

祝賀会の当夜芹原義重が、私の肩をたぐいて

「我々も来年は卒業して三十五周年になる。記念の会合はやっぱり京都にしようね」と云ったのを、思出した。

年を経る程、京都が懐しくなる。旧い友達が尊く感ぜられる。

私は来年の三十五周年には何をおいても出席して、また旧地の名所が廻りたいと考えた。

人工降雨の一考案

大二三 中 村 喜 一

(株式会社野本組)

行者正受金剛心 慶喜一念相應後

与草提等獲三忍 即証法性之常樂

人工降雨の一方方法について私が昭和七年より独自研究致し居ります。現在までの結論を一寸皆様に申し上げたいと思うのですが、我が日本国の山嶽地勢及氣象状況では私が昭和二十三年に遂に発見した理論による方法を併用せざる以上は、米国のラングミラー氏により発見された方法だけでは到底、人工降雨も水力電力界では実用化は夢の話ではないかと考へるものです。私の発見したと称する理論の科学的説明は六百字制限の紙数では説明しきれないので申しま

せんが甚だ抽象的の話で誠に失礼致しました。鬼灯や藪ともつかず畑とも

思 い 出 の 故 人

大二四 一 本 松 珠 璣

(日本原子力発電株式会社副社長)

電気工学教室は六十周年を迎えた。私もやがて六十になるうとして居るが、まだ思ひ出を書く気になりにくい。私の今やっている原子力発電の仕事はまだ胎動を始めている所で、一人前所か生れてさえない。

併し私の生れた明治三十四年に、電気教室才一回の卒業生が出て居る。私は二十六回目の卒業で、私のあとには三十三回も卒業生が出て居る。

洛友会の名簿を繰って見ると、私の知っている人のうちには物故者も多い。その故人のうちから私の心に残った思ひ出を書いて見たい。

青柳栄司先生

思ひ出は先づ青柳先生から始めねばならない。

信念の講義が印象に残っている。何でも合理的信念から宗教的信念にいたり、色々説かれたが、今以って私に迫るのは先生の人格そのものである。確かに非常に善いものを私達に残された。

全学連あたりの姿を見られたら、先生は何と云われるであろう。

本野 亨先生

直流機の講義より、先生の美しい声、端正な態度、華旅様の一族と云うこと。若い私は一種畏敬の念を以て先生を懐しく思った。

清水義一先生

交流機の講義、正弦波交流発電機の学位論文は抜群のもので、頭のよいこと無類、但し先生は時にお酒を召して「今日は頭が重いので早くやめる。」と云われ、吉田山散歩に出かけた思ひ出もある。

大竹太郎先生

電気特論という特に難かしい学課だった様に思う。先生も大の酒好き。

清水先生、大竹先生、こうもお酒の好きな先生が禁酒の喧ましい青柳先生と一緒にいられたものと思議に思っていた。

雨宮春雄氏（明治三十四年卒）

私の生れた年に電気教室を卒業せられた雨宮さん。私は雨宮さんを最も尊敬している。

私は卒業するとすぐ大阪市電に入ったが、その時の電気部長が雨宮さん。採用の面会に行ったときの温い態度に私は感激した。あとは辞令を貰ったとき挨拶に行く位であった。

雨宮さんが辞職された時、電気倶楽部で送別会があった。その時に、「新陳代謝は人倫の大道である。」と云われた卒直真摯な言葉を忘れることは出来ない。

光風斎月とは雨宮さんのこと、私は思っている。

吉川 忠氏（明治四十二年卒）

私の最も長い間仕えた大阪市電気局電気課長。

吉川さんは主張と信念とを持った人であった。強烈すぎる位な個性の持ち主であった。心血を注いで大阪市電力系統の十年計画を樹立、実行した人である。

経営者の技術者は多いが頑固に技術を守り通した此の人の如きは少い。孤高の古武士とも称すべき人。私は此の人の影響を最も多く受けた。私の学位論文「大都市電力系統計画論」は氏の構想から生れたものである。

青木忠次郎氏（大正五年卒）

吉川さんの次に私は青木さんに仕えた。青木さんは船場の旧い立派な家に生れられたので物の考え方が非常に手堅かった。

青木さんは細いと聞いていたが、私には凡てを委せられて一番仕事やし易かった。

堅実な仕事を教えこまれた青木さんに私は感謝している。

矢野定三氏（大正六年卒）

聯珠の名人。碁は私の弟子。

大阪市電気局に入ったとき、木津君と二人でまっさきに新町のお茶屋に連れて行かれ、深更二時に帰宅したことがあった。課長と云うものは随分えらいものだと言ったことを感じた最初である。

岩田健夫君（昭和二年卒）

大阪市電気局高速鉄道建設部にいた岩田君が若くして先立たれた。

此の人には一種云い難い人懐しい半面があった。若いのに此の味のあるのを私はいつも感心していた。

洛友会の人達の中でも惜まれてならぬ人であった。（一九五八、一一、九）

量 子 論

大 一 四 橋 本 真 吉

（日立製作所取締役）

この間、一寸した集りの席で、一本松さんも小宮さんも既に本誌へ原稿をお出しになっていてお前も出せということになり、その後数日して山村さんが見えになって同じお話に、六十周年記念会出席のため京都への車中、縮む腕にやっとなんかペンを持たせた次才である。

頭の悪い私に神様がお恵をたれ給ふてか、私の数へ年は西紀と一致し私の卒業後の週年は昭和と一致する。我が電気教室は十九世紀に生れ私が廿世紀に生れていることがすぐ分る。そして私は同窓会の年次では正に中堅層である。つとめて同窓会に出れば大先輩より大分若いことが意識されて、それだけでも若返り得る所以である。

折角若返った気持ちになったのに、原稿の行が変わった途端に昔の回顧では年寄くさくなるので百周年の頃の夢を書いてみようかと思つたが、見とどけられそうもないことを書いては無責任のそしりを免かれないので再び卒業の頃に話をもどしたい。

その頃恩師青柳先生から日立へ就職しないかとのお話が出た。先生の講義で日立のIOリレーのことが二、三行出た他日立の日の字も知らなかった。日立工場へ面会に行ったが当時の高尾工場長や馬場博士等幹部の三、四の方々個別にお会いするだけで、こんな淋しい所で辛抱出来るかとの幹部の質問に対する私のイエスカノーの返事のみが合否の決め手で後は全面的に学校の推薦を信用された。何も知らなかった私は、これは頂戴すべきでないと突然出された帰途の旅費を再三固辞したのに誠心誠意の安部係員から無理矢理受取られたばかりに、淋しい日立助川の風景が頭に去来する東海道線車中の迷も、青柳先生のお室へおそるおそる伺う頃には先手を打たれた採用通知の電報と共に、私の新しい未知の運命は好むと好まざるとにかかわらず既にスタートを切つてしま

っていたのであった。

人生も亦因果律を否定する量子論に相通するものあるを後年屢々知らされた。それにつけても楠本・榊原・三浦諸先輩は御健在であるの一番の大先輩鎌居さんが既に亡くなられてしまったことは惜しみても余ある痛恨事である。(十一月十五日同窓会出席のつばめ車中にて)

三五年前の一とこま

大一四 富 永 和 郎

(安川電機製作所常務取締役)

車で走りながら、チャットと右手の門の中を見たら、思わずアッと云う程真黄ない、ちよの落葉、その厚い鮮烈な黄色の道が玄関迄、そして両側のい、ちよの木があんなに大きくなったのか、三十五年前に三年間いた寮の生活がパッパと頭をかすめた。六十周年の会場に急いだ昼過ぎの事である。

——一世の碩学アインシュタイン博士が、改造社の招きで来日、京大を訪れたのもこの頃だった。法経の大講堂で講演があり、その通訳に当った法学部だかの先生が、予期せぬ専門的な話になった為、約束が違うからと笑い乍ら途中で通訳を投げ出した所、話が終ってから、一緒に話していた石原純博士が立って、唯今のは非常に珍らしいしかも貴重な話で、今迄どこでもした事のない話だから惜しい気がする、学生諸君にその要点を伝えたいと云うので、確か特殊相対性原理を組立てるのに、自分はどちらかと云えば数学に不得手だったので友人の数学者の協力を求めた。その協力がなかったら巧く早くいかなかったかも知れぬという風な前提で、その内容に就て可成り詳しく話された様に記憶する。

内容は勿論分らなかったが、当時世界的に矢筈しかかった相対性理論の成立に關する珍らしい話が、偶然とは云え御本人の口から、京都でなされた事も面白い事ではなかるうか。

講演後電気教室北側の、当時は暗渠でなかった水路の近くで、物理教室の前面にベンチを持ち出して、物理学の先生や学生と気軽に記念撮影をするのを眺めていると、真につまらん事を憶えていて恐縮だが、ハンカチを取り出して西洋流にチンと鼻をかんだこの人なつこい碩学の顔が今でもありありと目に浮ぶ

のである。——これも忘れ難い想出の一つである。

同 窓 会

大一五 小 宮 義 和

(日立電線株式会社常務取締役)

大正十五年に卒業したときは四十一人で、物故者、消息不明が十一人、現在健在なのは二十九人である。

卒業後十年目の昭和十一年四月には二十六人、十五年目の十六年四月には十二人が教室に集まり、才一回目には青柳、本野、鳥養、加藤、松田、関野諸先生、才二回目には鳥養、岡本、加藤、松田、羽村諸先生が御出席下さった。今写真を出してみると青柳、本野両先生をはじめ故人となられた方が憶い出されて懐しい。

二十年目は戦争直後で集ることが出来ず、二十五年目は二十六年五月に三度、十四人が教室に集まり、清水、鳥養、岡本、加藤、松田、関野諸先生に来て頂いたが、物故者はこの十年間が一番多く長く消息の絶えた後の再会を互に喜び合い、昼は清風荘、夜は岡崎つる家に長時間歓談した。席上子供の数やその縁談の話が出て互の年輩を思わせた。

三十年目は東西の中央ということになり、田中卓次君のお世話で十八人が三十一一年四月伊勢参宮の後、鳥羽に一泊したが遠方のこととて先生方の御出席はお願いしなかった。

十五年前の集りで、其頃三十年目の会合を持たれた鳥養先生が「お互に生きていることを唯感謝し、出世不遇などは考えなくなる」と仰ったことが、此の時現実となって居り会社の停年制などで仕事の変るものもふえて来ていた。三十年間の中程十五年位は戦争で無我無中に働き、戦後は社会不安と労働攻勢の矢面に立ち家庭生活を犠牲にして働いた。鳥養先生も停年を越して再度学長に御就任になり、屢々育動する学生の説服に御苦勞なされた時代であった。社会も漸く安定に向って来たが技術革新に際会し、公私共に今迄働き足りなかつた分をこれから取返す積りで働かねばならず、戦前のように楽隠居は許されそうもない時代となっている。(三三、一一、一)

感激を新らたにして

昭二 林 重 憲
(京都大学工学部教授)

「京都大学一覽」のあるページに次のような条文がある。

「明治三十一年六月三十日、文部省令十四号をもって、理工科大学に、数学、物理学、純正化学、製造化学、電気工学、採鉱冶金学の六学科が増設された。」と。

従って、わが電気工学教室は、今年六月三十日をもって、創立後滿六十年を迎えたことになる。この間、教室を御卒業になった方々は二千四百名を越え、これらの人達が、学会、業界、官界に尽された功績には測り知れぬものがある。憶えば、永年にわたる恩師ならびに諸先輩の御努力の結集されたものが、京都大学、電気工学教室の背景であって、現在、電気、電子、両教室に席をおくわれ、教職員は、たゞ、先人の余慶の上に安住させて戴いているに過ぎぬのである。

昭和三十三年十一月十六日は、われわれにとって最良の佳日であった。この日、洛友会の皆様方の御高情によって、電気工学教室創立六十周年の記念行事が取り行なわれ、公務御多端をも意に介せられず、各地から参集された恩師ならびに先輩は、二百名に近く、物故教職員ならびに先輩の御遺族方、とくに故難波、青柳、本野諸先生の奥様方、それに、日頃、兄弟のおつきあいを祝っている電気工学講習所御卒業の方々を、お招きして、感激の一日を過ごした事は、何物にも代え難い喜びであった。

戦後、日本国民は、いろいろの事情もあって、とかく歴史を転じ、時には、これを否定しようときえする風潮になりがちであったが、これは敗戦が生んだ悲しむべき精神傷害の一つである。世界、いずこのところに、自ら進んで歴史を抹殺しようとする国があるであろうか。アメリカ合衆国のような、比較的浅い歴史をもった国でさえも、各風物を何んとかして歴史的に意義づけようとする努力が到る所で見受けられる。歴史こそは民族の心の糧であり支柱である。歴史を失った民族は、やがては亡びるであろう。

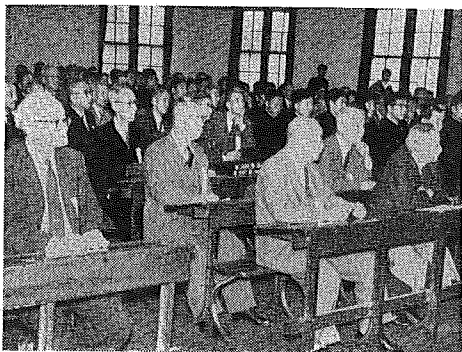
この意味において、六十年の輝やかしい歴史と、各時代を通じての才一流の立派な恩師と先輩の方々に恵まれた、わが電気工学教室は何たる幸いなこと

であつたらうか。

記念式典の才一行事として、教室の筆頭名誉教授であり、又、終戦は、総長として、京都大学を、万代の安きにおかれた。鳥養利三郎先生から「わが電気工学教室と電気事業の回顧及びその将来」という題目で、長時間にわたり、心温まる御話を承わったのは、何物にも代え難い喜びであり、とくに若い人達ならびに学生諸君には貴い教訓であつたと思う。引きつづいて、物故された教職員ならびに、先輩各位の慰霊祭が工学部大会議場にしたらえられた祭壇の前で、崇厳に取り行なわれ、一同一入感激を新らたにした次才である。式後、京都ホテルで催された記念パーティでは、老若相擁し、互に手を握り、肩をたたきあう和やかにして感慨深い風景が至るところで見受けられた。当日は、危やぶまれた天候も幸いに回復して、万事祝典にふさわしい好日和であった。これも在天の恩師ならびに諸先輩の御霊が当日を嘉みせられ、その御加護によつたことであらう。

終りに、公務極めて御多端の折りにも拘らず、当日御来会賜った皆様方の御芳情に対する感激は筆舌に尽し難いものがあるが、ここに、失礼をも省みず紙面をかりて謹んで御礼申上げる次才である。なお、われら、電気、電子、両教室に席をおくものにとつては、この六十年の伝統に輝やく電気教室の歴史を、どうやったら汚す事なく守り続けて行けるかどうかという心配がある。

願わくば、恩師ならびに先輩の方々には何卒機会ある毎に、われらを御叱正御激励賜り、われらの行くべき途に誤りなきよう常に御導き下さるよう、この機会に御願ひ申上げて稿を終りたいと思う。



講演会場

京都大学工学部電気工學教室

六十周年記念行事

昭和三十三年十一月十六日(日)午後一時より次の如く執り行はれた。

一、記念講演会

開会の辞

林 重 憲

開会の辞

林 重 憲

この京都大学工学部電気工學教室、正確に申しますと、京都帝国大学理工科
大学電気工學教室と申さねばいけないかも知れませんが、いずれにしまして
も、わが電気工學教室が設立されましたのが明治三十一年、云いかえますと十
九世紀の末葉だったのでございますが、爾來幾變遷を経まして、本年をもちま
してこゝに滿六十周年を迎えるにいたしました。

その間に御活躍になります卒業生の各々は、すでに二千有余名を数えま
して、学界、業界につくされました御業績にはかり知れないものがございます
す。今更私などが喋々すべきところではございませんが、これらは全く、諸先
生並びに諸先輩の御努力の賜でございます。われら現職員といたしまして
は、その上に安住させていたゞいてはいる様なわけでございます。教室に職を奉
じます我々一同は、この点を心に銘記いたしました。この名譽ある電気工學教
室の歴史を傷つけないと常に祈念しておる次第でございますが、本日は十一月
十六日、これは大安の吉日に當るようでございますが、この吉日を卜しまして
洛友会の諸先輩の方々の御好意によりまして、わが電気工學教室創立六十周年
記念祝典を開催していただきましたことは、洛友会の一員といたしましたは、
誠に御同慶にたえない次第でございます。又教室の一員といたしましては、
感激にたえない次第でございます。厚く御礼申上げたいと存する次第でござ
います。

記念会の行事の一つといたしまして、記念講演会が開催されることとなりま
して、その御講演を、前京都大学総長であり、現在の電気工學教室の名譽教授
の最筆頭におられます鳥養利三郎先生にお願い申上げましたところ、心良く御
引受け下さいまして、本日は鳥養先生から、こゝにかゝりました様な標題、

即ち、「わが電気工學教室と電気事業の回顧、及びその将来」という題目につ
きまして御講演願うことになりましたことは、我々一同の最も光榮とするこ
ろでございます。つきましては皆様先輩の方々におかせられましては御繁忙
中、御遠路わざわざ御来学下されました事に対しまして、厚く御礼申上げたい
と思ひますが、つきましては鳥養先生の御講演を漸時御静聴あらんことを願
い申し上げます。甚だ簡単でございますが、御挨拶といたします。

特別講演

わが電気工學教室と電気事業の回顧とその将来 鳥養利三郎

(別項参照)

閉会の辞

林 重 憲

閉会の辞

林 重 憲

たゞいまは、鳥養先生から、電気教室六十周年祝典に際しまして、極めてふ
さわしい感激深いお話を、心暖まる御調子で拝聴いたしましたことに対し
て、厚く御礼申上げたいと思ひます。

科学技術発展の立場からいたしますと、六十年の歴史は誠に長いものでござ
います。その間、諸先生、諸先輩がなされた御苦勞、御努力には並々ならぬも
のがございました。その結果、現在の京都大学電気工學教室の社会的なバック
が築かれた次第であると存じます。戦後我々色々な事情によりまして、歴史を
軽視し、時にはこれを否定する様な風習に時として慣される様なこともござい
ましたが、世界の文明国で歴史を軽ろんずる国はないのでございます。アメリ
カの様に比較的浅い歴史をもつ国でございます。各風物をみますと、これ
に歴史的に何とか意義づけしようとした努力がみられる様でございます。歴史
的な現実の上に立ちまして、精神的な面を築こうとする努力が見受けられるの
でございます。歴史を失いました国は亡びると考えられるのでございまして、
我が電気工學教室は、只今の鳥養先生のお話しにもございました様に、輝やか
しくも長い歴史をもちまして、社会に御活躍になる二千有余名の諸先輩に恵ま
れて居るのでございまして、常に感激致しておる次第でございます。今後共に
諸先生並びに諸先輩の御遺訓並に御努力を心に銘記いたしまして教室の歴史を
恥かしめざる様一同努力してまいりたいと存する次第でございます。諸先生並

びに諸先輩におかせられましたも、何とぞ今後共御変りなく我らを御鞭撻、御指導賜わりまして、光輝ある電気工学教室の歴史をますます発揮出来得る様、御温情もって御激励賜わらんことを、この席をかりましてひとへにお願い申上げたいと存ずる次第でございます。

尚、本日諸先生並びに諸先輩におかせられましたは、極めて御多忙の折にもかゝりませず、御遠路わざわざ御来学賜わりまして本日の祝典に錦上花をそえていただきましたことに対しまして、厚く御礼申上ます。

二、物故者慰霊祭

午後三時半より物故教職員ならびに卒業生の慰霊祭が行はれた。

一、修 祓

二、降 神（一同起立）

三、献 饌

四、齋主諄詞（一同起立）

五、祭主祭詞（一同起立）

六、玉串奉奠

一、齋 主

祭主石川芳次郎氏の祭詞は

祭 詞

京都大学工学部電気工学教室創立六十周年を迎えるに当り謹んで物故教職員並びに物故卒業生各位の御霊に申し上げます。

わが電気工学教室は明治三十一年九月最初の入学生を迎えて授業が開始され輝かしい歴史の才一步を印したのであります。

爾来星霜を重ねること六十年、今日茲に記念の式典を挙げるに至りました。その間卒業生も亦に二、四二〇名の多きに達し、それぞれ社会の各方面に活躍せられ、わが電気工学教室教職員並びに卒業生らが電気工学界の発展に寄与した業績は誠に偉大なものがあります。

とりわけ物故教職員並びに物故卒業生各位の御業績が教室の名声を弥が上にも高からしめたことは、われわれの崇敬措く能はざるところであります。

いまや電気工学に課せられた使命の益々重きを加えつゝある今日、わが教室

が栄ある六十周年を迎えましたことを御霊前に謹んで御報告申し上げ、御霊の庇護の下に今後一層の努力を致し、電気工学の将来の発展に尽さんとの決意を新たにする次第であります。

願はくば物故者各位の御霊の安からんことを。

昭和三十三年十一月十六日

京都大学工学部電気工学教室
創立六十周年記念事業会

代表 石川 芳 次 郎

三、記念祝賀会

同午後六時より京都ホテル大ホールにて平沢京大総長ほか来賓会員多数出席の下に盛大に行はれた。

出 席 者

来 賓 平 沢 京 大 総 長 横 田 京 大 事 務 局 長 本 田 京 大 会 計 課 長

小 倉 京 大 庶 務 課 長 難 波 縫 子 青 柳 文 子

本 間 八 重

明 三 九 国 友 末 蔵

四 一 野 田 清 一 郎

四 三 石 川 芳 次 郎

四 四 大 森 丙

大 小 田 嶋 修 三

二 堀 鹿 造

三 小 林 愛 三

四 石 黒 九 一

五 七 里 義 雄

六 辻 忠 夫

七 山 村 忠 行

八 阿 部 清

一 〇 仙 石 甲 三

一 〇 岩 本 勝 弥

一 〇 丹 波 孝 三

後 渡 部 兼 雄

後 藤 嘉 明

道 田 貞 治

山 岡 景 範

岡 本 赴

三 宅 豊

上 林 一 雄

松 田 長 三 郎

佐 藤 一 男

清 水 勤 二

品 川 秀 雄

荒 井 武 治

鳥 養 利 三 郎

山 岡 景 範

岡 本 赴

三 宅 豊

上 林 一 雄

松 田 長 三 郎

佐 藤 一 男

清 水 勤 二

品 川 秀 雄

荒 井 武 治

創立六十周年を祝し

映えある教室の御隆昌と

卒業生諸賢の御発展を祈る

北海道電力株式会社

東北電力株式会社

東京電力株式会社

北陸電力株式会社

中部電力株式会社

関西電力株式会社

中国電力株式会社

四国電力株式会社

九州電力株式会社

創立六十周年を祝し
将来の御発展を祈る

東京芝浦電気株式会社

東京都中央区銀座西五丁目二番地

三菱電機株式会社

社長 関 義 長

東京都千代田区丸ノ内二丁目 東京ビル

株式会社島津製作所

社長 鈴木 庸 輔

京都市中京区河原町通二条南

株式会社日立製作所

社長 倉田 主 祝

東京都千代田区丸ノ内一 新丸ビル

株式会社安川電機製作所

社長 安川 寛

福岡県八幡市藤田

創立六十周年を祝し益々御発展を祈る

日本電池株式会社

社長 山岡景範
京都市南区吉祥院西ノ庄猪之馬場町

高周波熱錬株式会社

社長 有賀隆雄
東京都品川区北品川五丁目四九〇

立石電機株式会社

社長 立石一真
京都市右京区花園土堂町一〇

神鋼電機株式会社

社長 中井義雄
三重県鳥羽市鳥羽町一七一一番地ノ一

松下電器産業株式会社

社長 松下幸之助
大阪府河内郡門真町大字門真千六番地

日新電機株式会社

社長 香川修二
京都市右京区梅津高畝町二〇

大阪変圧器株式会社

社長 小林愛三
大阪市東淀川区今里北通三丁目一四番地

川崎重工業株式会社

社長 手塚敏雄
神戸市生田区東川崎町二丁目十四番地

創立六十周年を祝し益々御発展を祈る

富士電機製造株式会社

社長 和田 恒 輔
東京都千代田区丸ノ内二丁目六番地

富士通信機製造株式会社

社長 和田 恒 輔
東京都千代田区丸ノ内三丁目二番地 三菱二一号館

住友電気工業株式会社

社長 北川 一 栄
大阪市此花区貴島南之町六〇番地

古河電気工業株式会社

社長 小泉 幸 久
東京都千代田区丸ノ内二ノ八

日本電気株式会社

社長 渡辺 斌 衡
東京都港区芝三田四国町二番地

沖電気工業株式会社

社長 神戸 捨 二
東京都港区芝高浜町十番地

大日電線株式会社

社長 今泉 武 夫
大阪事務所 大阪北区梅田七番地(梅田ビル)

藤倉電線株式会社

社長 石橋 五 郎
東京都江東区深川平久町一ノ四

創立六十周年を祝し益々御発展を祈る

バブコック日立株式会社

社長 楠本宗次郎
東京都千代田区大手町二ノ四 新大手町ビル

日本セメント株式会社

社長 井上英熙
東京都千代田区大手町一ノ四

近畿電気工事株式会社

社長 佐藤太
大阪市北区南扇町二番地

大阪瓦斯株式会社

社長 井口竹次郎
大阪市東区平野町五丁目一番地

八幡製鉄株式会社

社長 小島新一
東京都千代田区丸ノ内一ノ一 鉄鋼ビル

富士製鉄株式会社

社長 永野重雄
東京都中央区日本橋江戸橋一ノ二一

日本鋼管株式会社

社長 河田重
東京都千代田区大手町一ノ二

株式会社淀川製鋼所

社長 浜田正信
大阪市東区博労町四丁目三〇番地

創立六十周年を祝し益々御発展を祈る

京阪神急行電鉄株式会社

社長 和田 薫

大阪市北区角田町四一

住友金属工業株式会社

社長 広田 寿一

大阪市東区瓦町四丁目三十一番地

住友化学工業株式会社

社長 土井 正治

大阪市東区北浜五丁目二番地

東洋紡績株式会社

社長 阿部 孝次郎

大阪市北区堂島浜通二ノ八

阪神電気鉄道株式会社

社長 野田 誠三

大阪市北区梅田町八番地

京阪電気鉄道株式会社

社長 村岡 三郎

大阪市東区天満橋

株式会社横河電機製作所

社長 横川 時介

東京都武蔵野市吉祥寺三〇〇〇

住友商事株式会社

大阪市東区北浜五丁目二十二番地

倉敷レヨン株式会社

社長 大原 総一郎

大阪市北区梅田二才一生命ビル

創立六十周年を祝し益々御発展を祈る

株式会社 宮木電機製作所

社長 宮木 男也
京都市中京区西ノ京原町四番地

株式会社 村田製作所

社長 村田 昭
京都市東山区山科日岡堤谷町一番地

株式会社 立正電機製作所

京都市南区吉祥院中島町四

新電元工業株式会社

社長 深津 五郎
東京都千代田区大手町二丁目四 新大手町ビル五階

新日本窒素肥料株式会社

東京都千代田区丸ノ内二丁目三番地

株式会社 関電製作所

大阪市福島区兼平町一八番地

工藤電気株式会社

社長 工藤 寿男
大阪市北区太融寺町五四番地

京福電気鉄道株式会社

社長 石川 芳次郎
京都市中京区壬生賀陽御所町三番地ノ二〇

鐘淵化学工業株式会社

社長 中司 清
大阪市東区本町四丁目二七

四国変圧器株式会社

社長 岩本 勝弥
香川県多度津町大字多度津

昭和三十三年十二月二十三日 印刷
昭和三十三年十二月二十五日 発行

【非売品】

編集兼 山 村 忠 行
行人

発行所 洛 友 会
会

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部電気工学教室内
振替口座 京都 二六九七七番

印刷所 株式会社 石田大成社印刷所
所

京都 京都市中京区丸太町通小川西入
電話①一四八八—一四八九番
電話②四一〇五—四一〇七番
東京 東京都千代田区神田兼倉町一九
電話③六七八五—七七八四番
電話④七八五一—七八五四番